

重要文化財佐太神社正中殿ほか2棟防災施設等事業に伴う発掘調査報告書

## 佐太前遺跡・佐太神社神宮寺跡

令和5(2023)年3月

島根県松江市  
公益財團法人松江市スポーツ・文化振興財團

重要文化財佐太神社正中殿ほか2棟防災施設等事業に伴う発掘調査報告書

# 佐太前遺跡・佐太神社神宮寺跡



令和5(2023)年3月

島根県松江市  
公益財團法人松江市スポーツ・文化振興財團

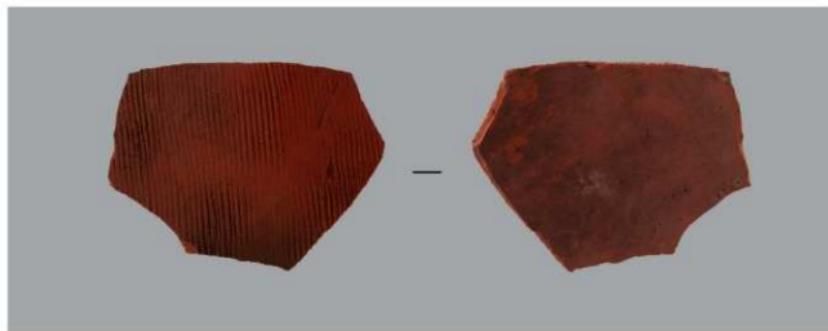




調査区北側から佐太神社を望む



朝鮮半島製の陶質土器 第 24 図 -1



朝鮮半島製の陶質土器 第 24 図 -2

## 例 言

1. 本書は、令和3年度に実施した重要文化財佐太神社正中殿ほか2棟防災施設等事業に伴う佐太前遺跡・佐太神社神宮寺跡発掘調査報告書である。

2. 本書で報告する発掘調査は、宗教法人佐太神社から松江市が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。

3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

(名 称) 佐太前遺跡・佐太神社神宮寺跡

(所在地) 島根県松江市鹿島町佐陀宮内 72・73 番地

4. 現地調査および報告書作成期間

現地調査 令和4年1月17日～令和4年3月23日

報告書作成 令和5年1月4日～令和5年3月31日

5. 開発面積および調査面積

開発面積 126.0m<sup>2</sup>

調査面積 105.0m<sup>2</sup>

6. 調査組織

依頼者 宗教法人佐太神社

主体者 松江市長 上定 昭仁

### 【令和3年度】 発掘調査業務

事務局 松江市歴史まちづくり部 部 長 松尾 純一(6月1日～)

〃 次 長 井上 雅雄(6月1日～)

〃 まちづくり文化財課 課 長 尾添 和人

〃 〃 埋蔵文化財調査室 室 長 川上 昭一

〃 〃 文化財総合コーディネーター 丹羽野 裕

〃 〃 調査係 係 長 川西 学

〃 〃 〃 主 任 古藤 博昭

〃 〃 〃 〃 啓 託 門脇 誠也

実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 星野 芳伸

埋蔵文化財課 課 長 宮本 英樹

〃 調査係 係 長 小山 泰生

〃 〃 調査員 廣瀬 貴子(担当者)

〃 〃 調査補助員 宇津 直樹

### 【令和4年度】 報告書作成業務

事務局 松江市文化スポーツ部 部 長 松尾 純一

〃 埋蔵文化財調査課 課 長 川上 昭一

実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 星野 芳伸  
埋蔵文化財課 課長 宮本 英樹  
調査係 係長 小山 泰生  
調査員 廣瀬 貴子(担当者)  
調査補助員 木村 由希江

7. 調査に携わった発掘作業員

金坂昇、野津健一、峯谷一雄、中村慎市

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下のものが行った。

木村由希江、須藤佳奈子

9. 発掘調査および報告書作成にあたっては、次の方々から多大なご指導・ご教授・ご協力を頂いた。

記して謝意を表する。(敬称略・五十音順)

赤澤 秀則(松江市立鹿島歴史民俗資料館 館長)

池淵 俊一(島根県教育庁文化財課 調整監)

西尾 克己(松江市史松江城部会長)

平郡 達哉(国立大学法人島根大学法文学部社会文化学科 准教授)

松永 悅枝(独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部飛鳥・藤原地区 考古第一研究室 研究員)

10. 本書の執筆は、第1章を松江市埋蔵文化財調査課 徳永隆が、第2～3章を廣瀬が担当した。編集は松江市埋蔵文化財調査課の協力を得て廣瀬が行った。

11. 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。

SB:掘立柱建物 SD:溝 SE:井戸 SG:池 SP:柱穴・ピット

12. 本書で示す方位は平面直角座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した平面直角座標系第III系の値にもとづく。

13. 本書で示す標高値はメートル表記である。標高値は東京湾平均海面(T.P.)値を使用した。

14. 本書に掲載する土層は『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修)にしたがって記載した。

15. 本書の遺構番号は調査時に設定したものを報告書作成にあたり、種別の番号に振り直して掲載した。

16. 本書に掲載した遺構図は、各図に縮尺とスケールを配置した。遺物実測図の縮尺は、弥生土器・土師器・須恵器は1/3、金属製品1/2、石製品1/3、木製品1/4・1/10、瓦1/4を原則としているが、これに従えないものはその都度縮尺を明記するようにした。断面の表現は須恵器を黒塗り、弥生土器・土師器を白ヌキ、金属製品・石製品を網掛けで示した。

17. 本書で用いた土器の編年と器種名については以下の論文・報告書に依拠している。

[弥生土器]

松本岩雄・正岡睦夫 1992 『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』 木耳社

※本文中に松本編年は松本編年○様式と記す。

鹿島町教育委員会 1992 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 5 南講武草田遺跡』

※本文中に弥生時代後期から終末の遺物は草田編年を用いて草田○期と記する。

[土師器]

松山智弘 2015 「山陰」『前期古墳編年を再考するⅡ—古墳出土土器をめぐって—』中国四国前方後円墳研究会 第18回研究集会実行委員会(香川大会)

島根県教育委員会 2013 『史跡出雲國府跡－9 総括編－』

※本文中に古墳時代前期の遺物は草田編年と小谷編年を用いるが、主として草田編年を用いる。

草田編年は草田○期、小谷編年は小谷○式と記述し、草田6期は小谷1式に、草田7期は小谷2式に併行するため本文中では草田編年で記す。

[須恵器]

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会

島根県教育委員会 2013 『史跡出雲國府跡－9 総括編－』

※本文中に古墳時代の須恵器は大谷編年を使用し出雲○期と記す。古代の須恵器は出雲國府編年を使用し出雲國府編年第○型式と記す。

[陶磁器]

日本中世土器研究会 2022 『新版 概説 中世土器・陶磁器』

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』

※本文中に陶磁器は九州陶磁の編年を使用し九陶○期と記す。

18. 註と参考文献は文末に記載した。

19. 本書の編集にあたっては、DTP方式を採用した。

20. 本書に掲載した測量データ・遺物および実測図・写真等の資料は、松江市にて保管している。

21. 本書に掲載した弥生土器・土師器・須恵器については、出雲地域における土器編年および畿内との併行関係を捉えるために、次頁の各編年で設けられている時期区分を年代の指標とした。

時代	松本編年	草田編年	松山編年 (土師器) 松山 2021	大谷編年 (須恵器) 大谷 1994、大谷 1997、 大谷 2001、大谷 2003 ※出雲 1 期の細分は松山 2021 を参照	出雲國府編年	畿内編年
前期	I-1 様式 I-2 様式 I-3 様式 I-4 様式					
中期	II-1 様式 III-1 様式 III-2 様式 IV-1 様式 IV-2 様式					
後期	V-1 様式 草田 1 期 V-2 様式 草田 2 期 V-3 様式 草田 3 期 V-4 様式 草田 4 期 V-5 様式 草田 5 期					
古墳時代	草田 6 期 草田 7 期	1 期 小谷 1 式 小谷 2 式 小谷 3 式 小谷 4 式 II 期 大東 1 大東 2 III 期 大東 3 出雲 1 期 古相 中相 IV 期 大東 4 出雲 2 期 新相 V 期 大東 5 出雲 3 期 出雲 4 期 出雲 5 期 出雲 6a・b・c 期 出雲 6d 期 出雲 7・8 期 出雲 7 型式 出雲 8 型式 出雲 9 型式 出雲 10 型式				布留 0 式 布留 1 式 布留 2 式 布留 3 式 布留 4 式・TK73～TK216 TK208・TK23・TK47 MT15 TK10・MT85 TK43 TK209・飛鳥 I 古 飛鳥 I 新 飛鳥 II 飛鳥 III～IV 飛鳥 V・平城 I～II 平城 III 平城 IV～V 平城 VI・平安 I 中～新 平安 II 古～中 平安 II 新 平安 III 古～中 平安 III
古代						
中世						

大谷見二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学誌』第 11 集 島根考古学会

大谷見二 1997 「出雲地方の須恵器編年表」『第 7 回 山陰横穴墓調査検討会 出雲の横穴墓 - その型式・変遷・地域性 -』山陰横穴墓研究会

大谷見二 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市教育委員会

大谷見二 2003 「古墳群と古墳の時期」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター

出雲地域における弥生土器・土師器・須恵器編年および畿内編年併行関係対照表

# 目 次

## 例 言

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 試掘調査と本調査の方法	7
第1項 試掘調査の概要	7
第2項 調査の方法と経過	9
第2節 本調査の概要	9
第3節 基本層序	10
第4節 遺構と遺物	12
第1項 第1遺構面	12
第2項 第2遺構面	19
第3項 遺構外出土遺物	22
第4章 総括	30
第1節 遺構・遺物	31
第2節 佐太前遺跡周辺の集落跡	33
第3節 結語	34

遺跡観察表

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

第 1 図	調査位置図	1
第 2 図	佐太前遺跡・佐太神社神宮寺跡位置図	2
第 3 図	『解説 出雲國風土記』の秋鹿郡地図	3
第 4 図	佐太前遺跡・佐太神社神宮寺跡周辺の遺跡分布図	6
第 5 図	事業範囲と調査範囲図	7
第 6 図	試掘トレンチ実測図	8
第 7 図	試掘トレンチ出土遺物実測図	8
第 8 図	調査完了後の測量図	10
第 9 図	調査区南壁(A-A)・東壁(B-B)土層断面図	11
第 10 図	第 1 遺構面遺構配置図	13
第 11 図	SGO1(C-C) 土層断面図	14
第 12 図	SGO1 出土遺物実測図	15
第 13 図	SEO1 実測図	16
第 14 図	SEO1 出土遺物実測図	17
第 15 図	鍛冶炉跡実測図	18
第 16 図	鍛冶炉跡出土遺物実測図	18
第 17 図	第 2 遺構面遺構配置図	19
第 18 図	SBO1 実測図	20
第 19 図	SBO1 出土遺物実測図	21
第 20 図	SDO1 実測図	22
第 21 図	55 層出土遺物実測図	23
第 22 図	62 層出土遺物実測図	25
第 23 図	75・88・95 層出土遺物実測図(1)	26
第 24 図	75・88・95 層出土遺物実測図(2)	27
第 25 図	97 層出土遺物実測図	29
第 26 図	層位不明出土遺物実測図	29
第 27 図	佐太神社社殿配置(貞享期以前)と調査区・社務所の位置関係	30
第 28 図	佐太神社社殿配置(貞享期)と調査区・社務所の位置関係	30
第 29 図	佐太前遺跡発掘調査位置図	33
第 30 図	佐太前遺跡周辺の集落遺跡	34

## 図版目次

巻頭写真 調査区北側から佐太神社を望む  
本文中写真 朝鮮半島製の陶質土器  
写真 1 調査区北側石列検出状況(北側から)

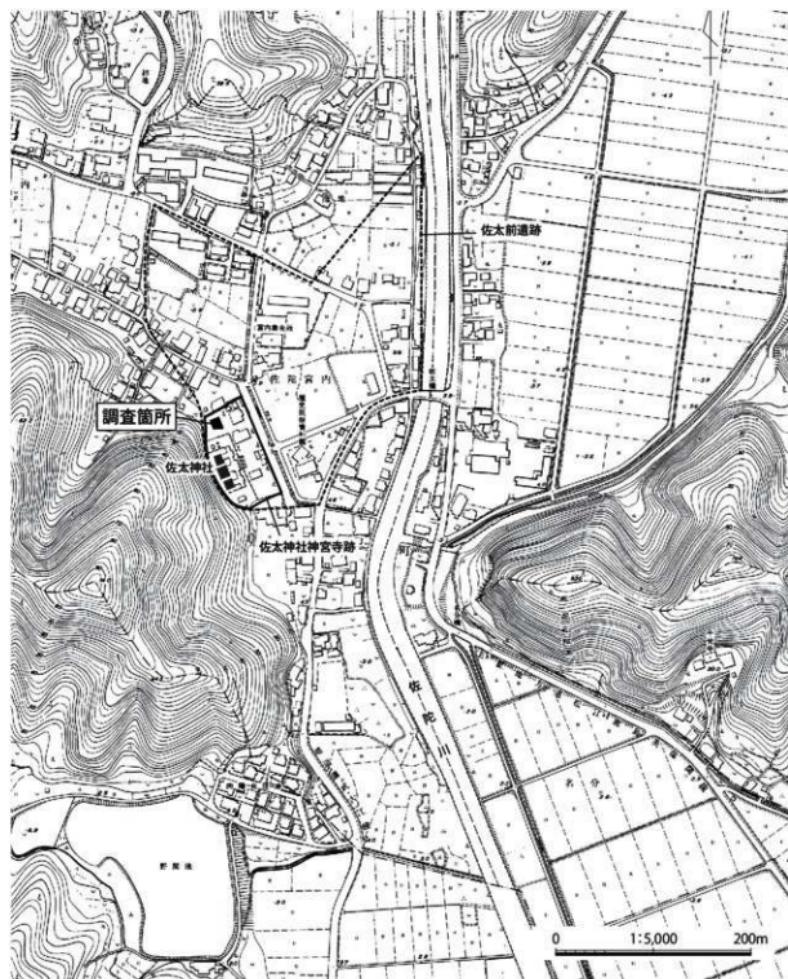
- 図版 1 調査前近景(南西から)  
調査区北側石列検出状況(南西から)  
図版 2 土層断面南壁 A-A'(北西から)  
土層断面東壁 B-B'(北西から)  
図版 3 第 1 遺構面(南西から)  
第 1 遺構面 SGO1 土層断面 C-C'(南東から)  
図版 4 第 1 遺構面 SEO1 完掘状況・土層断面(北東から)  
第 1 遺構面 SEO1 遺物出土状況  
図版 5 第 1 遺構面鍛冶炉跡検出状況  
第 1 遺構面輪形鉄滓検出状況  
図版 6 第 2 遺構面完掘状況(北から)  
88 層出土の高坏(第 23 図-5)  
図版 7 ~ 14 出土遺物

## 第1章 調査に至る経緯

本調査地は、かねてより弥生時代からの拠点的な集落跡と想定される「佐太前遺跡」の範囲内として周知されており、また、これに内包される佐太神社境内部分が「佐太神社神宮寺跡」として2重に遺跡指定されていた。今回、佐太神社の境内部分において、防火対策として消火水槽の設置が検討されることとなったことから、松江市に埋蔵文化財にかかる協議があり、令和3年5月に、工事範囲の試掘調査を実施したところ、事業予定地内には良好な状態で遺構が残存していることが確認された。このことから、同年12月に佐太神社から発掘の届出の提出を受け、島根県教育委員会と協議の結果、発掘調査の指示を受けることとなった。以上の経過から、当該地の発掘調査を、令和2年8月から実施するに至ったものである。



第1図 調査位置図



第2図 佐太前遺跡・佐太神社神宮寺跡位置図

## 第2章 位置と歴史的環境

### 第1節 地理的環境（第3図）

佐太前遺跡・佐太神社・神宮寺跡遺跡は、松江市鹿島町佐陀宮内に所在する。鹿島町は、松江市街地の北西側、島根半島のほぼ中央に位置しており、北側と西側は日本海に面している。鹿島町の東側に位置する講武盆地は谷奥から流れ出す講武川によって作られた沖積地で肥沃な耕作地となっており、古くから水稻耕作地としての条件を備えていたものと考えられる。

本遺跡は、佐太神社境内に位置し、周知の遺跡である佐太前遺跡の範囲内にある。本遺跡の東側には佐陀川が流れおり、この佐陀川は江戸時代に運河として整備されたもので本来は講武盆地から宍道湖方向に流れていた多久川と日本海側から内陸部に入った恵曇岐が原形となっている。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』をみると、本遺跡から佐陀川沿いを西に向かえば恵曇岐を経て日本海に面する恵曇港に至り、佐陀川を南に下れば佐太水海という水域を経て宍道湖へと至り、本遺跡は水上交通の面から利便性の高い場所であったと考えられる。また、海や川、山の幸に恵まれ、良好な水稻耕作地を有する当地域は生活環境に恵まれた地域である。このようなことから鹿島町には多くの遺跡が存在しており、以下では主な遺跡の概要について時期毎に述べる。

### 第2節 歴史的環境（第4図）

#### 縄文時代

鹿島町における縄文時代の遺跡には、1933年に国指定遺跡となった佐太講武貝塚（19）がある。この貝塚本体は縄文時代前期の所産であるが、貝層に面する周辺低湿地の調査を総合すると、断絶する時期はあるものの縄文時代晚期までの生活がみられる。貝塚から出土した貝類は、ヤマトシジミを中心とした汽水産のものが大半を占めていることから、貝塚が形成された縄文時代前期には、周辺が汽水湖として穏やかな内海で貝の生育に適した環境にあったようである。この汽水湖はのちの奈良時代に編纂された『出雲風土記』の「佐太水海」や「恵曇岐」の前身と考えられ、貝塚は南北にそれぞれ汽水域をもつ分水嶺に位置している。



第3図 『解説 出雲國風土記』の秋鹿郡地図

また、貝層中にはほかに堅果物の果皮や鯉や鮑科の魚骨が多く含まれていることから、当時の人々の汽水域での漁労活動や周辺の山野における採集活動が窺われる。

そのほかの遺跡として、後期から晩期の土器が多量に出土した堀部第1遺跡(34)や晩期の土器が出土した北講武氏元遺跡(37)、後期から晩期の自然流路が検出された佐太前遺跡<sup>(1)</sup>(2)がある。

### 弥生時代

北講武氏元遺跡から遠賀川系の土器が出土し、講武盆地において初期水田が開発されていたことや集落が形成されていたことが想定される。北講武氏元遺跡から南東側に位置する堀部第1遺跡からは60余基の墳墓が確認され、木棺材の一部やその痕跡が残存していた。また、墳墓と隣接する北講武氏元遺跡との関連が窺われ興味深い。日本海側をみると弥生時代前期から中期の集団墓地である古浦砂丘遺跡がある。砂丘の下から60体以上の人骨が確認され、なかでも頭蓋骨の額部分に青銅の縄錆がついた人骨はシャーマンを想像させる。佐太前遺跡では弥生時代前期の大溝や土器溜まりが検出されている。土器も多量に出土しているためこの地域の拠点集落と考えられ、大溝は集落を区切る溝と推測されている。中期では佐太前遺跡のほか稗田遺跡<sup>(2)</sup>(1)、志谷奥遺跡(22)、名分塚田遺跡(15)などが知られている。恵雲院の南西側に位置する稗田遺跡では中期から後期にかけての大量の木製品が出土しており、周辺に拠点となる集落の存在が窺われる。志谷奥遺跡は、『出雲國風土記』で秋鹿郡における「神名火山」と考えられている朝日山の山麓に所在し、銅鏡2個、銅劍6本とその埋納土壙が確認されている。名分塚田遺跡では中期の遺物が出土している。後期では四隅突出型埴丘墓の可能性のある南講武小廻遺跡(30)や弥生時代末から古墳時代前期の近畿系や吉備系の土器や朝鮮半島の土器など搬入系の土器が大量に出土した南講武草田遺跡(31)が知られている。ほかに弥生時代の住居跡が鶴灘山遺跡(17)、戸崎遺跡(7)、大勝間山城跡(18)で検出されている。

### 古墳時代

古墳時代では講武盆地を中心に丘陵上に多くの古墳群が確認される。前半期の古墳には名分丸山古墳群(20)、奥才古墳群(27)、鶴灘山古墳群(16)がある。名分丸山古墳群は講武盆地の西側に位置する古墳群で、1号墳は埴丘長40mを測り、前方部が撥型を呈する前方後方墳である。令和4(2022)年に行われた調査では2基の埋葬施設と土師器が出土しており、古墳出現期の前方後方墳を考えるうえで注目されている。奥才古墳群は、講武盆地の南側丘陵上に位置する古墳群である。前期から後期まで築造が行われ、主体部は細長い木棺または石棺で、礫床と呼ぶ小石敷きのものが多くみられる。また、「奥才型木棺」と呼ばれる長い縦敷きの木棺を2~3室に区切った特徴的な木棺は、北部九州や丹後、畿内に分布しており海上交通による交流があったと考えられる。副葬品として鏡類や玉類、石鉈、鉄製品を伴うものがあり、有力者の埋葬施設である。鶴灘山古墳群は、本遺跡の北側の独立丘陵に位置する10基余りからなる古墳群である。未調査であるが、中型の柄鏡型前方後円墳が存在することから前期に位置づけられると推測されている。後期では切石造りの石棺式石室をもつ講武岩屋古墳(40)や、鉄劍や須恵器の子持壺が出土した向山古墳(39)がみられる。横穴墓は、20穴以上からなる寺の奥横穴群(42)、整正家形の恵谷横穴群(44)、2体の人骨とともに金銅製の主頭大刀が出土した高田尾横穴墓(50)などがあげられる。

## 奈良・平安時代

奈良時代から平安時代の遺物が出土する遺跡は北講武氏元遺跡や戸崎遺跡などが存在するが遺物の出土量は少ない。講武川流域条里制遺跡(28)では10世紀頃に講武盆地で条里制が敷かれたと考えられ、明治22年調整の字限地図及び現地の景況から察知される当地区条里制遺構の範囲図には条里制地域にみられる三ノ坪・柳ヶ坪・八ヶ坪・丁ヶ坪などの小字名が残っている。

本遺跡が所在する佐太神社は奈良時代に編纂された『出雲国風土記』の「秋鹿郡条」に「佐太御子社」と記載される神社で、『延喜式神名帳』では「佐陀神社」と記載されている。平安時代末には佐太神社周辺は、安楽寿院に寄進され佐陀荘が成立している。

## 中世

佐陀荘の莊園鎮守として成立した佐陀神社は一般に「佐陀社」「佐陀大社」と称された。社殿は三社殿構造となり、『延喜式神名帳』の裏書に「二宮佐陀神社」と書かれており、一部において出雲國の二宮の地位を占めると認められていた<sup>(4)</sup>。戦国末期になると佐陀荘は毛利氏の支配下に入り、莊園としての体制は失われていったようである。

戦国時代には周辺の丘陵に山城が築かれている。築造年代が文献から推測できる山城のうち最も古いのは鎌倉時代前期に佐々木氏が築造した講武殿山城跡(43)、次は室町時代前期に朝山氏が築造した池平山城跡(25)、そして芦山城跡(12)、室町時代後期の海老山城跡(9)・大勝間山城跡がある。

## 近世

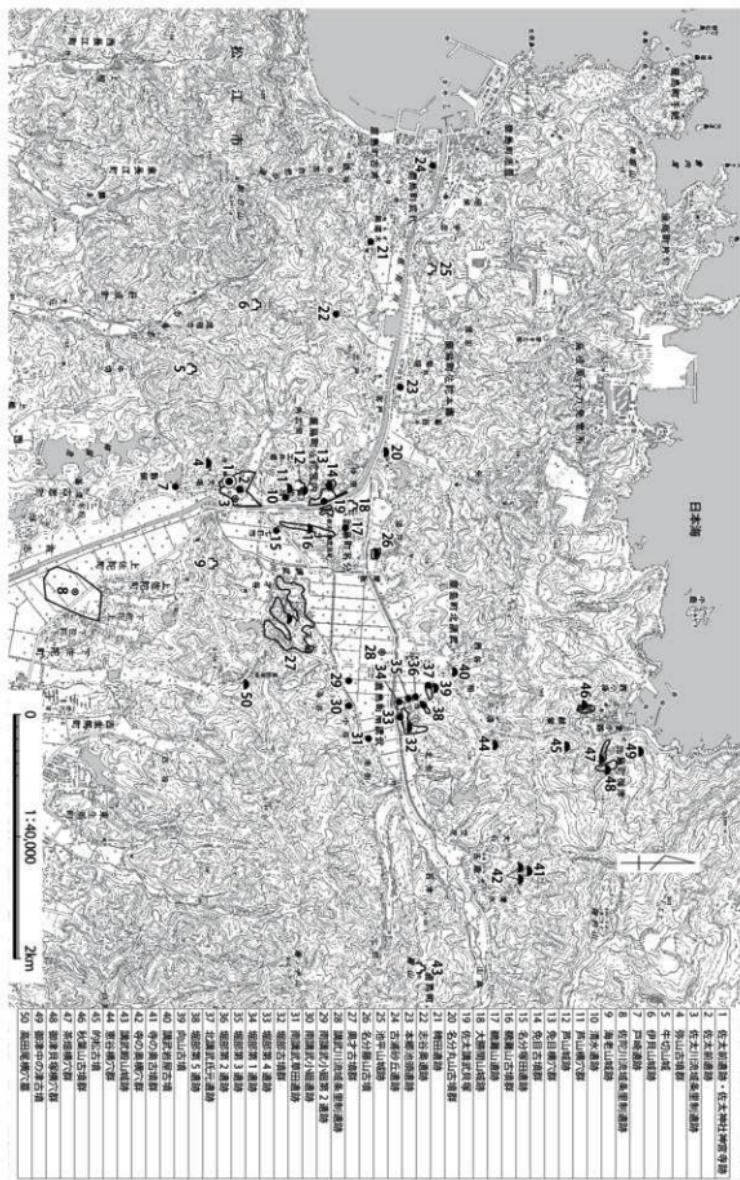
近世では、松江藩の清原太兵衛により佐陀川の開削が行われ、天明年間(1781～1789年)に運河が完成している。佐陀川は、現在の日本海と穴道湖を繋ぐもので、この運河の完成により穴道湖沿岸の水害は緩和されて流域の水田開発に大きな影響を与えた。また、水運による交易が盛んとなり経済的発展をもたらすこととなった。

### 【註】

- (1) 2007年～2009年に行われた広岡川河川改修事業に伴う佐太前遺跡発掘調査により確認された遺構である。
- (2) (1)と同じ
- (3) 名分丸山1号墳は島根県古代文化センターによる発掘調査が行われ、令和4年12月18日に現地説明会が行われた。トレンチ調査により理葬施設や埴丘の形態・構造・古墳の築造年代について新たな所見が得られている。
- (4) 井上寛司 1997年「中世佐陀神社の構造と特質」『重要文化財 佐太神社－佐太神社の総合的研究－』に記載されている。

### 【参考文献】

- 古浦遺跡調査委員会・鹿島町教育委員会 2005 『古浦遺跡』  
 烏根県古代文化センター 2014 『解説 出雲国風土記』  
 烏根県古代文化センター 1985 『奥才古墳群』  
 烏根県鹿島町教育委員会 1992 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』  
 烏根県鹿島町教育委員会 1997 『佐太講武貝塚』  
 烏根県鹿島町教育委員会 2005 『塙部第1遺跡』  
 烏根県松江市教育委員会 2009 『高田尾横穴墓』  
 松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 2007 『鶴瀧山遺跡他発掘調査報告書』  
 松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 2009 『大勝間山城跡発掘調査報告書』  
 松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 2010 『佐太前遺跡発掘調査報告書』



第4図 佐太前遺跡・佐太神社神宮寺跡周辺の遺跡分布図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 試掘調査と本調査の方法

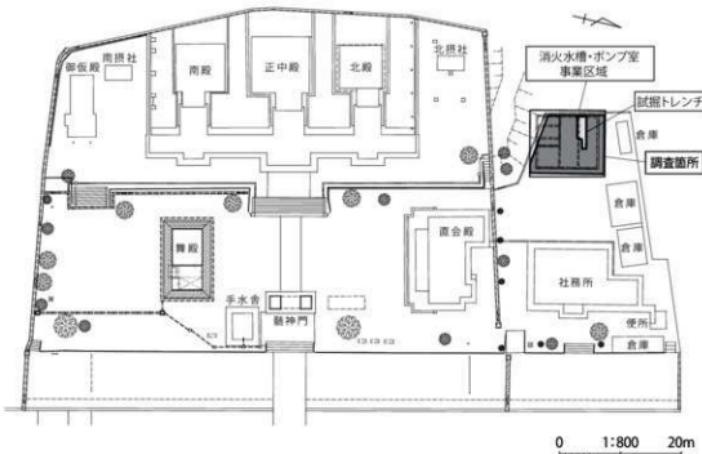
#### 第1項 試掘調査の概要(第5図)

重要文化財佐太神社正中殿ほか2棟防災施設等事業に伴って、佐太神社北摂社の北側にポンプ室と消火水槽の建設が予定されたことにより遺構の有無を確認するため試掘調査を実施した。試掘調査は令和3年5月13日において1箇所の試掘トレンチを設定して、重機により掘削を行った。以下、試掘調査の概要を述べる。

#### 1. 試掘トレンチ(第5~7図・写真1)

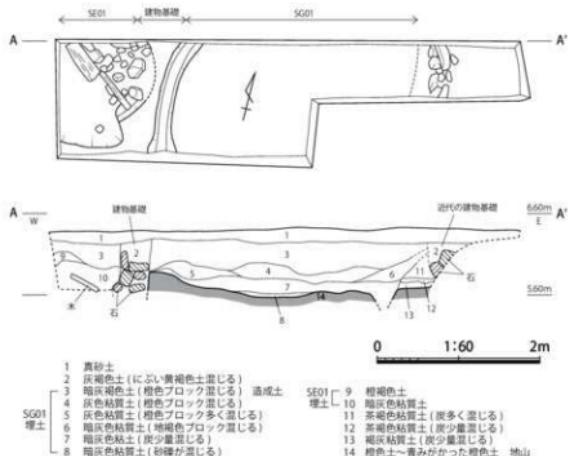
事業区域の中央、やや西側に設定した東西5.0m、南北1.5mのトレンチである。現地表面下15cmまで真砂土が確認され、この下層でトレンチの西端から約1.0m東側で建物基礎や後述する池(SG01)が検出された。また、西端では湧水のため地山まで掘削はできなかったが、井戸(SE01)が検出された。トレンチの大半がSG01内で、地山はGL-85cm前後で検出しているが、概ね西から東に向けて傾斜している。遺物は礫や木製品・瓦・磁器片が出土している。

第7図は試掘トレンチの出土遺物である。7-1は中国青花の磁器皿である。口径10.5cmを測り、内面に二重環線がみられる。時期は16世紀後半から17世紀初め頃である。7-2は陶器で、備前焼の裴岸である。器壁は厚く、内面灰褐色、外側褐色を呈する。近世以降と考えられるが、破片のため詳細な時期は不明である。7-3は長さ18.2cm、幅17.2cm、厚さ0.7cmを測る方形の木製品である。一方の側面に径3mmの木釘が2箇所確認される。7-4は丸瓦の体部である。凹面にコピキ<sup>ア</sup>の痕跡と縦

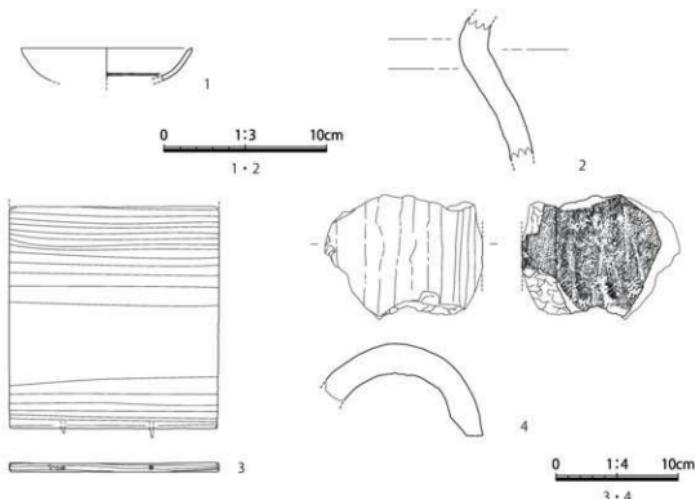


第5図 事業範囲と調査範囲図

方向の工具痕やナデの痕跡が認められる。また、凸面には幅1cm程のケズリの痕跡がみられる。16世紀末である。



第6図 試掘トレンチ実測図



第7図 試掘トレンチ出土遺物実測図

## 第2項 調査の方法と経過

事業区域内において松江市埋蔵文化財調査課による試掘調査を行った結果、遺構や遺物が存在することが確認された。このため事業区域内のうち、西側と南側の排水路をのぞく範囲について本調査を実施した。本調査地は佐太神社の北摂社の北側に位置し、現況は平地である。最初に基準点を調査地まで引き込み、次に調査範囲の設定を行った。調査範囲の西側と南側は排水路が破損しないように約50cmの緩衝地を設けた。調査区の地表面には真砂土が薄く敷かれており、重機による真砂土の除去と同時に試掘トレンチの埋め戻し土の掘削を行った。試掘トレンチの精査により遺構面と土層の確認を行ったあと、遺構検出のため調査範囲全体の真砂土の掘削を行い調査を始めた。調査範囲が狭いことや作業の可動範囲が限られていること、そして排土を東側にしか置けないことから土層観察用畦を十字に設定することが困難であったため、畦は調査区中央で試掘トレンチの延長線上に設定して土層観察(C-C')を行って、調査を実施した。

検出した遺構の平面測量はトータルステーションを用い、その測量データと遺構を照合しながら平面図におこしてレベルを記入した。方位は世界測地系に準拠した座標北を基準としている。また、遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用している。土層図はレベルを用いて手測りにより縮尺1/20で作製した。遺構の記録写真は3mmデジタルカメラとフルサイズデジタルカメラ一眼レフを併用して撮影を行った。

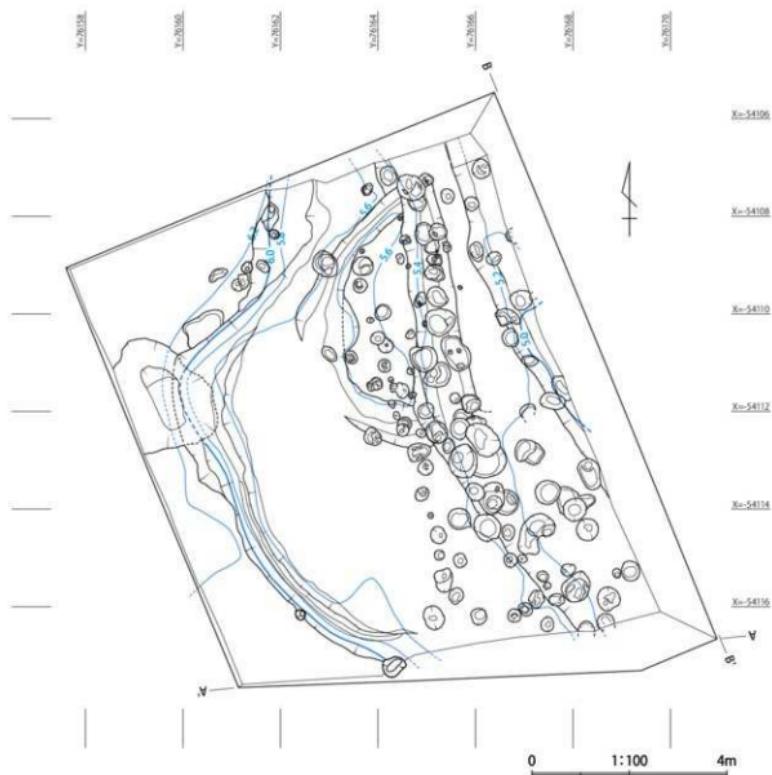
## 第2節 本調査の概要(写真1・第8・11図)

重機による真砂土の掘削を行うと、調査区北側から南側に向かって伸びる石列が検出された。石列は南側で西側に折れてL字状を呈しており、建物基礎の南西角を検出したものである。この建物基礎は試掘の際に検出されたものと同一建物基礎で、溝状に掘った所に石を入れて基礎としたもので布掘りの基礎である。<sup>(2)</sup> ほかに池(SG01)・井戸(SE01)・鍛冶炉跡・柱穴・溝を検出し、この面を第1遺構面とした。

第1遺構面の下層については、調査区中央に設定した土層断面C-C'(第11図)をみるとSG01の底面東側と地山の間に遺物を多く含む包含層(32~37層)が確認された。また地山面にも遺構を確認したことから、この地山の面を第2遺構面として調査を行った。第2遺構面では多数の柱穴と溝が確認され、掘立柱建物跡1棟を復元している。第2遺構面からは、遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多く出土している。

写真1 調査区北側石列検出状況(北側から)

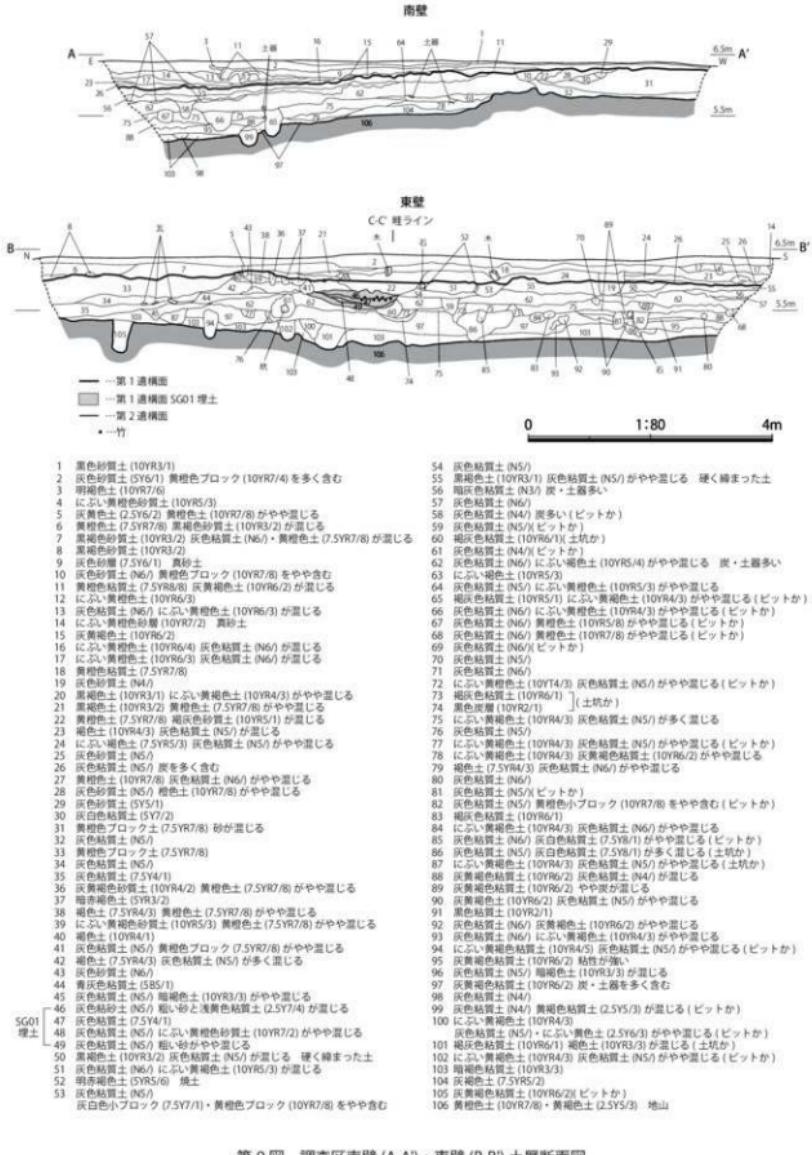




第8図 調査完了後の測量図

### 第3節 基本層序(第9図)

調査前の地表面の標高は 6.3 ~ 6.5m である。調査区の基本層序は調査区南壁 (A-A') と東壁 (B-B') から述べてみたい。1 層は真砂土、2 ~ 26 層は近・現代の擾乱土や造成土で近・現代の遺物が含まれていた。これらの土層を掘削して検出した面が SG01 や SE01 等を検出した第 1 遺構面である。第 1 遺構面の主たる基盤層は黒褐色土 (55 層) である。層厚は 10 ~ 20cm、標高 6.0 ~ 6.2m を測り、遺物は古墳時代から中世前半の土器や須恵器が出土している。この土層は非常に硬くて締まりのある土層で、明らかに人工的に固化されたと思われるため造成土と考えられる。B-B' 土層断面 46 ~ 49 層は SG01 の埋土で、49 層下面が底面である。22 ~ 45 層は SG01 の埋土を切るように北側に向かって堆積した土層で、近世以降の遺物が出土しているため新しい時期の土層と考えられる。52 層は焼土である。2箇所の焼土の内側は落ち込み、壁面が焼けたような状況を呈している。調査区中央に設定した土層断面 C-C' にも同じような焼土を伴う土坑がみられたが調査途中で畦が崩落したため



第9図 調査区南壁 (A-A')・東壁 (B-B') 土層断面図

平面検出はできなかった。

55層の下層には 56～105 層の堆積土や遺構埋土が確認される。遺構埋土以外の主な土層について述べると、62 層（灰色粘質土）は層厚 10～30cm を測る土層で、古墳時代から古代の須恵器や土師器が出土している。75 層（にぶい黄褐色土）、88 層（灰黄褐色粘質土）、95 層（灰黄褐色粘質土）は調査区中央から南東側に堆積した土層で粘性が高く、炭を多く含む土層である。これらの土層からは弥生時代から古墳時代前期の土器が多く出土している。97 層（灰黄褐色粘質土）、103 層（暗褐色粘質土）は地山面上に堆積した粘質土である。97 層からは弥生土器や古墳時代前期初頭の土器が出土している。これらの土層は 55 層のように人為的に手が加えられたような感じがしないため堆積土と考えられる。

地山面は調査区西側では SG01・SE01 により掘削されているが、東側では西側から東側に向かって傾斜している。東側地山面からは溝や多数の柱穴が検出され、第 2 遺構面としている。地山の検出標高は調査区西側で 5.8m、中央付近で 5.6m、東側で 5.0m を測る。

最終地山面（第 2 遺構面）で遺構検出を行っているが、東壁と南壁の土層断面をみると柱穴や土坑の遺構が認められ、掘り下げ途中に遺構面が存在していたと思われる。

## 第4節 遺構と遺物

### 第1項 第1遺構面(第10図)

第 1 遺構面では SG01・SE01・鍛冶炉跡・溝・柱穴を検出している。SG01 は調査区の大半を占める池で、SE01 は調査区西端に位置する井戸である。この 2 基の遺構は試掘トレントの掘削や建物基礎のため新旧関係は不明である。鍛冶炉は調査区中央付近の東側で検出された遺構で近くから楕円形鉄滓が出土している。溝や柱穴は SG01 周辺で検出された。柱穴から建物は復元できなかったが、検出状況からすると SG01 が掘削される前には他にも柱穴が存在していた可能性が考えられる。

以下では第 1 遺構面で検出された SG01・SE01・鍛冶炉跡について報告する。

#### 1.SG01(第10・11図)

##### 規模・形態

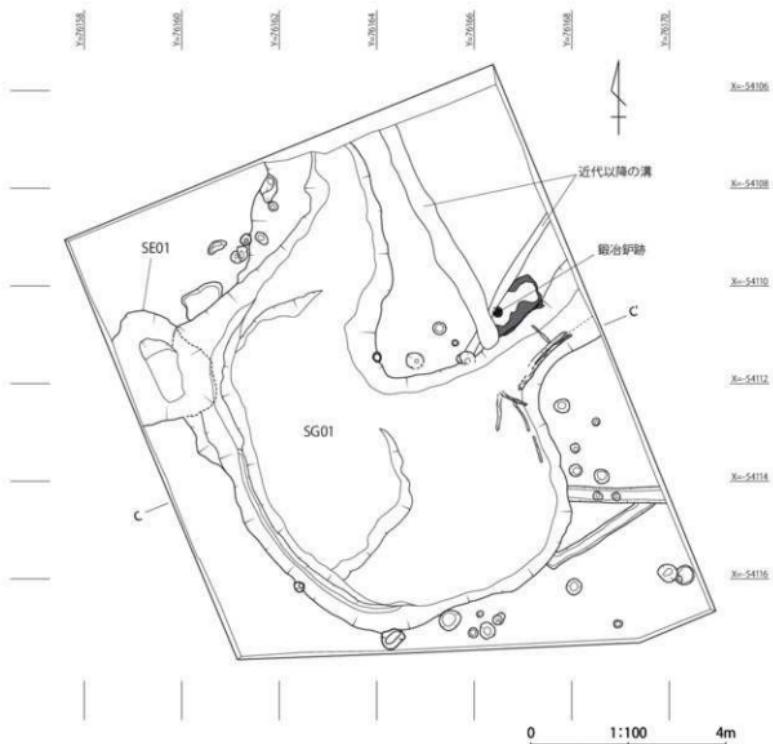
SG01 は第 1 遺構面の大半を占めるもので、北側と東側は調査区外へと続いている。平面形は北側から東側に向かって湾曲するような形を呈しており、また底面に砂混じりの粘性土の堆積が認められることから池とした。SG01 は、西側は地山面を基盤とし、東側は堆積土（第 11 図 32・33・36 層）を基盤とする素掘りの池である。現状での規模は南北 10.0m、東西 6.5m、深さ 70cm、底面標高は一番深い中央付近で 5.5m を測る。北側と東側は幅が狭くなっている、北端は幅 2.1m、深さ 50cm、底面標高 5.7m、東側は幅 1.5m、深さ 55cm、底面標高 5.5m を測る。東側が 20cm 低くなっていることから導水は北側、排水は東側と考えられる。土坑の西側の壁際には幅 10～15cm、深さ 5cm 程度の浅い溝がみられ、粗い砂が混じることから水が流れている可能性が高い。

土坑の東端では底面の南側に沿うように東西方向に径 12cm の木があり、その下側の土層（第 11 図 24・28 層）には径 1cm の竹が南北方向に 10cm 程度の間隔で確認された。これらの木や竹の性格はわ

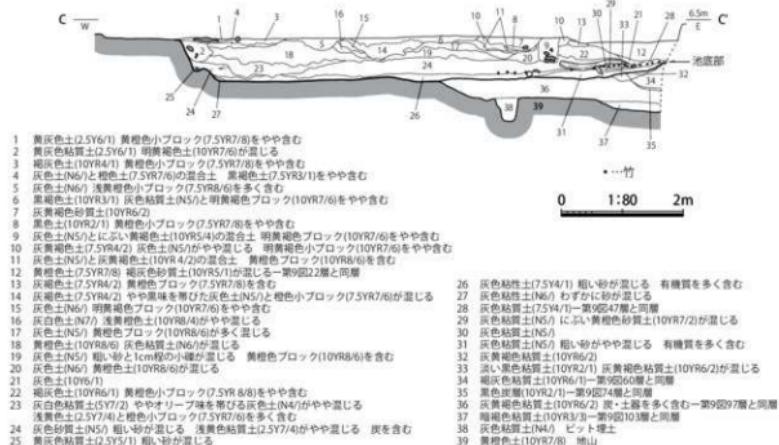
からないが土坑の底面を補強するためのものであろうか。北側には同様な木や竹はみられないため東側のみを意識したものである。

#### 土層堆積状況(第11図)

池内の堆積土は概ね二つに大別される。上層(1~22層)は地山土層の黄橙色土が多く混ざる土層、下層(23~31層)は主に灰色を呈する粘質土や粘性土である。上層の土層にはいくつかの切り合いがみられるもののいずれも地山土層が多く混じることから人為的に埋められた土層と考えられる。下層の粘質土や粘性土は灰色を呈し、なかには粗い砂や有機質が含まれる土層がみられる。特に底面近くの26・27層には粗い砂が混じると同時に木の枝や葉などの有機物が多く含まれており、このような状況をみると水の流れはあるものの有機物が沈殿するような緩やかな流れの時期もあったように思われる。



第10図 第1遺構面遺構配置図

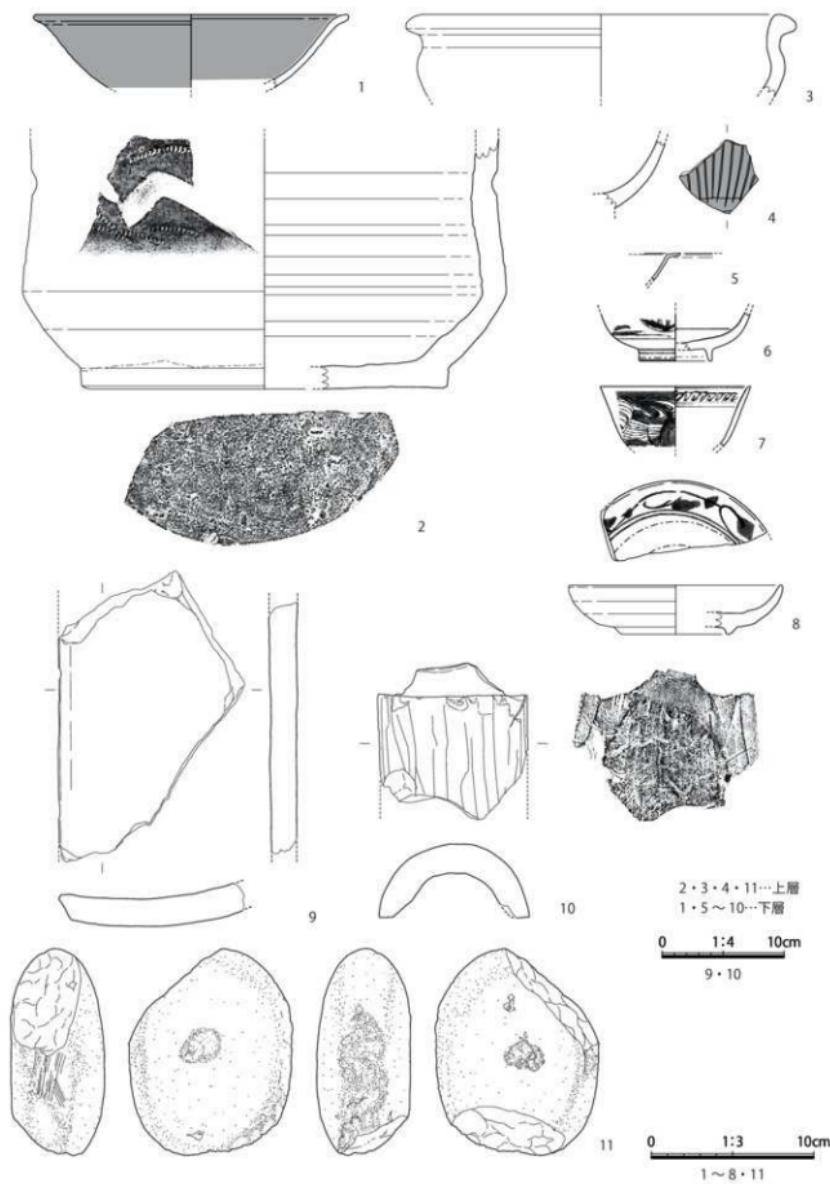


第11図 SG01(C-C) 土層断面図

## SG01出土遺物(第12回)

遺物は上層から陶磁器と石製品が、下層から磁器と瓦が出土している。石製品(12-11)は繩文～弥生時代のもので混入品と考えられるが、それ以外の遺物は中世後半から近世のものである。12-2～4・11は上層、それ以外は下層からの出土である。

12-1～3は陶器である。12-1は須佐焼の鉢で、陶器地の上に青磁釉を掛けている。口径19.4cmを測り、口縁部に向かって開いている。17世紀初め頃のものである。12-2は肥前系の陶器で、底径22.5cmを測る大型の鉢である。内面に格子状の叩き痕を施し、外面上に櫛目文が認められる。内外面に緑色の釉が掛り、底面は無釉である。底部外面上は工具で成形した後ナデている。時期は不明である。12-3は布志名焼の鉢で、内外面は緑色を呈し、口縁端部は玉縁を呈する。時期は19世紀前半である。12-4は中国、龍泉窯の青磁碗である。外面に櫛描連弁文が描かれており16世紀前半から中頃のものである。12-5～8は磁器である。12-5は肥前系の白磁である。器壁は薄く、口縁部がほぼ直角に外方へ折れている。高台付杯の口縁部と思われるが、時期は不明である。12-6は肥前磁器の丸碗である。体部外面上に丸文が描かれている。九陶V期(1780～1810年)である。12-7は肥前磁器の碗である。外面上と内面の口縁部に線描きによる文様が描かれている。九陶V期である。12-8は肥前磁器の皿である。内面の口縁部に唐草文が描かれ、見込みに蛇の目の釉剥ぎが認められる。置付は無釉で、高台脇のつくりがあまい。九陶V～4期(1820～1860年)である。12-9は平瓦である。外面上に剥離剤のキラ粉がみられ、内外面の器面が銀化している。18世紀以降の瓦と思われる。12-10は丸瓦の玉縁側である。四面にコビキAの痕跡と吊り組痕が認められ、凸面にヘラ状工具によるミガキを施している。16世紀末頃のものである。12-11は擦石・敲石で混入品である。一部は破損しているが、擦痕や凹みが認められる。



第12図 SG01出土遺物実測図

## 2.SE01(第13図)

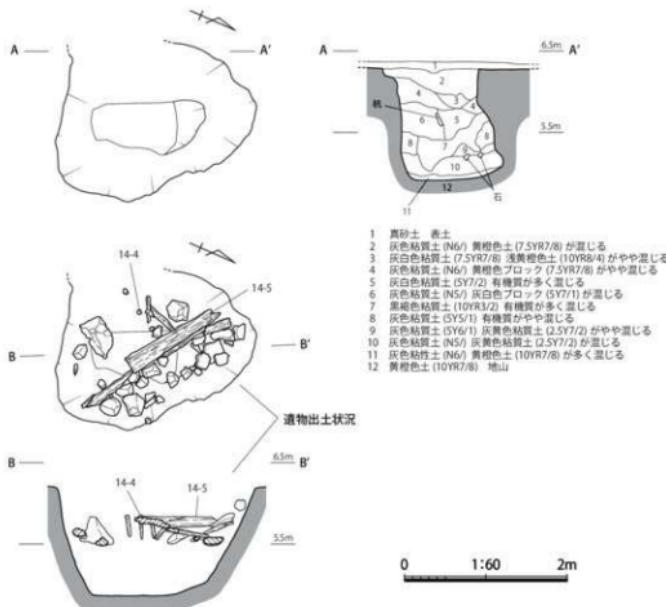
## 規模・形態

SE01は調査区西側で検出したもので、一部は調査区外へ続いている。平面形は楕円形を呈し、現状での規模は南北2.36m、東西1.9m、深さ1.32mを測る。形状と湧水が激しいことから井戸と考えられ、近くに使用されてはいないが類似する井戸が1基現存することから井戸と判断して間違いないと思われる。SG01との関係は建物基礎による擾乱により判然としなかった。

遺構の上方は試掘トレンチ調査により掘削されており、図化した遺構の上端は標高6.2mの位置を示している。

## 土層堆積状況

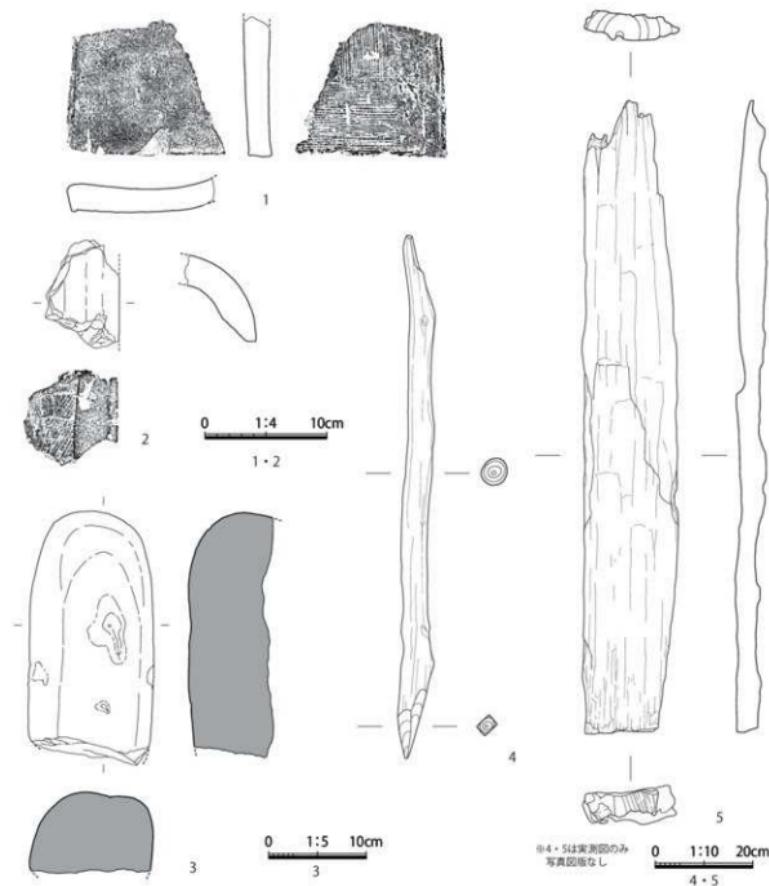
土層断面図は、調査区西壁で実測を行った。埋土は底面に地山上層(12層黄橙色土)を多く含む灰色粘土(11層)が堆積し、その上に灰色粘質土や黒褐色粘質土(5~10層)が75cmの厚さで堆積していた。これらの土層には有機質が含まれており、特に7・8層で多く確認された。その上方には地山上層を含む灰色粘質土や灰白色粘質土が認められ、その厚さは47cmを測る。11層は堆積土と思われるが、2~10層は人為的に埋め戻された土層で礫や木製品が多くみられ、特に5・6層からの出土が多く、井戸を埋める際に一緒に埋められたものである。



第13図 SE01 実測図

## SE01出土遺物(第14図)

SE01からは、径10～45cmの礫や板材や杭、瓦が出土している。第14図はSE01の出土遺物である。14-1は平瓦である。厚さ2.2cmを測り、表面はナデ、裏面はハケによる器面調整を行っている。時期は近世以降と思われる。14-2は丸瓦で、凹面にコビキAの痕跡が認められ、凸面はヘラによるケズリの痕跡がみられる。16世紀末頃の瓦である。14-3は石製品で、側面と一方の端部は破損している。中央に凹みがみられるため石台のようなものと思われる。残存長25.1cm、残存幅12.8cm、厚さ8.2cmを測る。14-4は長さ1.07m、最大幅6cmを測る杭である。先端の14cmを加工して尖らせている。



第14図 SE01出土遺物実測図

14-5は長さ1.30m、幅19.7cm、最大厚8.0cmを測る板状の木製品である。一部にハツリ痕が認められ、部材と思われる。

### 3. 鋼治炉跡(第15図)

鋳治炉跡は調査区東側の中央付近で検出した遺構である。遺構の北西側から西側は近代以降の溝にきかれている。炭が南北1.18m、東西0.73mの範囲に厚さ2~4cmでみられる。その南西側に直径20cmの焼土が確認され、中心部分は黒色を呈して硬く、周辺は赤褐色に焼けている。遺物は炭層から土師器の高台が、炭層の北東端から楕円形鉄滓が出土している。

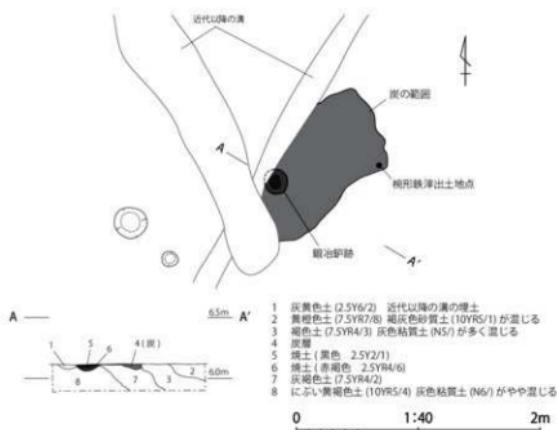
楕円形鉄滓は検出時には直立したような状態で原位置は留めているもの動いていると思われる。鋳冶炉の南東側、土層断面C-C'東端においても焼土を伴う土坑が確認されたが壁が崩落してしまい検出はできなかった。

### 鋳冶炉跡出土遺物(第16図)

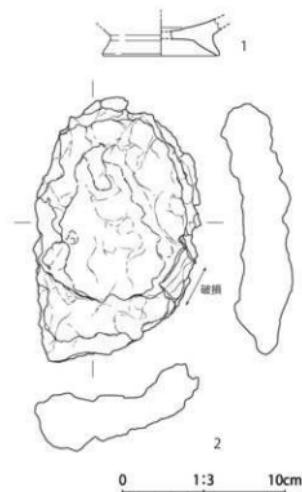
第16図は鋳冶炉跡の出土遺物である。16-1は土師器の环または皿の底部である。底径7.6cm、高台の高さは1.4cmを測り、黄橙色を呈する。出雲国府編年第6~8型式(9世紀中葉~11世紀前半)頃のものと思われる。16-2は楕円形鉄滓である。長軸長15.7cm、厚さ3.4cmを測り、断面は楕状を呈する。鉄滓の破損部分の断面をみると横方向に三層確認され、滓が接合しているのがわかる。

出土した遺物は9~11世紀代と考えられるが、後述する第1遺構面の基盤層から12世紀代の遺物が出土しているため12世紀代以降の鋳冶炉と考えられる。

神社等の関連施設の建設に伴い釘や鍔などを製作するため、敷地内において鋳冶を行っていたと考えられる。



第15図 鋼治炉跡実測図



第16図 鋼治炉跡出土遺物実測図

## 第2項 第2遺構面

第2遺構面は、標高5.0～5.7mの地山面で検出した遺構面である。地山は東へ向けて傾斜して下るが、調査区西側はSG01・SE01により地山面まで掘削されており、第2遺構面は斜面下向で遺存した調査区東側でのみ検出した遺構面である。

第2遺構面では多数の柱穴と溝が検出された。そのなかに南北方向に掘られた溝に柱穴が確認され、埋土や柱間距離から1棟の掘立柱建物跡(SB01)を復元している。この建物跡は溝を伴うことから布掘建物跡と考えられる。SB01のほかにも柱穴は多数みられるが、建物跡の復元には至らなかった。ただ、柱穴の検出状況をみると斜面に並行するように柱穴の並びがあるようみられるため、桁行を南北方向にとるような建物がほかにも存在していたと考えられる。

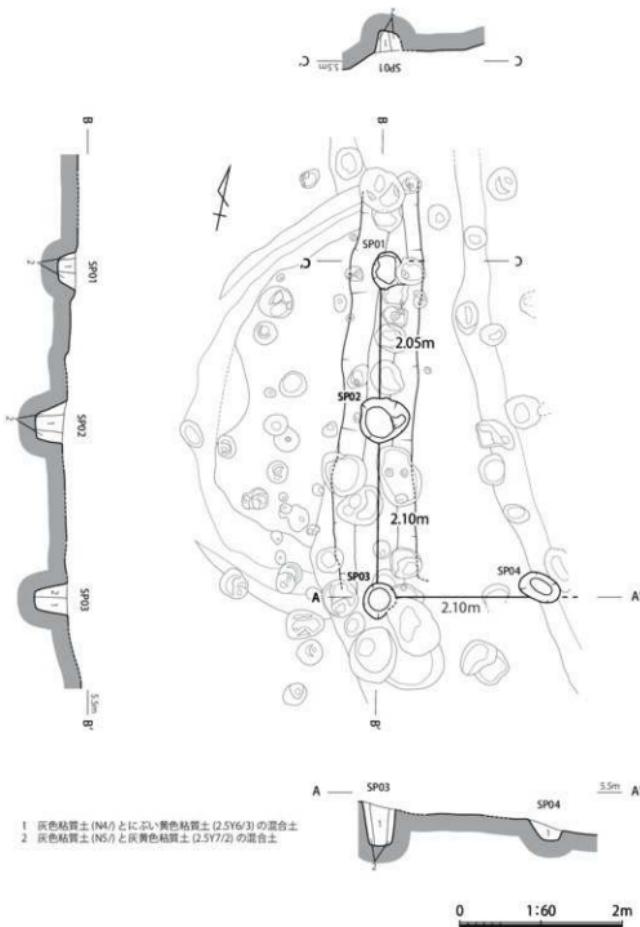
遺構はほかにSB01の西側で弧状を呈する溝( SD01 )が検出された。



第17図 第2遺構面遺構配置図

## 1.SB01

SB01は調査区北側の中央よりやや東側で検出した布掘建物跡である。南北方向に延びる浅い溝に柱穴が掘り込まれている。溝内には多数の柱穴が確認され、埋土と柱間距離からSP01～03が建物に伴うと判断した。溝の両端は柱穴に切られているため不明であるが、規模は現状で、長さ5.0m、幅0.85～1.0m、検出面からの深さは西側で25cm、東側で15cmを測る。また、東壁側で検出したSP04も同じ埋土であることや柱間距離から想定してSB01に伴うものと捉えた。建物跡の規模は桁



第18図 SB01実測図

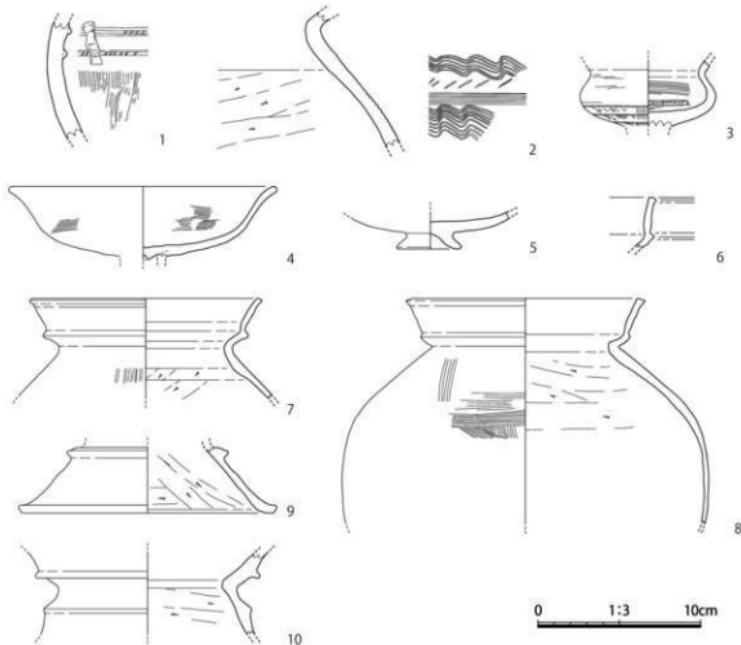
行2間、梁行1間以上で、桁行4.15m、梁行2.1m以上である。柱間の心々距離は桁行のSP01～02が2.05m、SP02～03が2.10m、梁行は2.10mである。建物の桁行の方位はN-10°-Wを示している。

柱穴の平面形は不整形な円形や楕円形を呈している。規模はSP01が径46cm、深さ28cm、SP02が径60cm、深さ47cm、SP03が径45cm、深さ52cm、SP04が径50cm、深さ20cmを測る。SP01～03の土層断面で径が18～20cmの柱痕が確認された。

遺物は、柱穴SP03から土師器の表片(19-6)と溝の埋土(褐色土)から弥生土器や土師器が出土している。

SB01は溝の北側が後述するSD01北側を切っていることからSD01が古、SB01が新と考えられる。  
**SB01出土遺物(第19図)**

第19図はSB01の出土遺物である。19-6はSP03から出土した表片で、それ以外は溝の埋土から出土している。19-1・2は弥生土器、19-3～10は土師器である。19-1は壺の頸部である。外面に断面三角形の突帯の上に刻み目をし、棒状浮文を貼り付けている。弥生時代中期、松本編年Ⅲ-1様式と思われる。19-2は壺・甌類の胴部である。外面に貝による波状文・直線文・列点文を描いている。



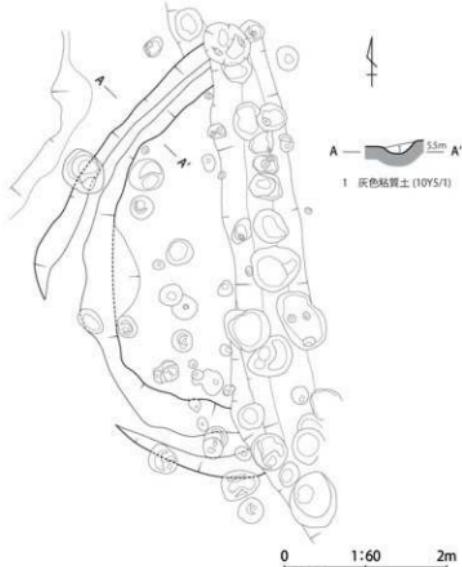
第19図 SB01出土遺物実測図

弥生時代終末頃と思われる。19-3は脚付の壺または鉢である。扁平な体部から内湾して口縁に続くもので、内外面にハケメとナデを施している。近畿系の遺物と考えられる。19-4は高环で、环底部から口縁にむかって緩やかに外反する。全体的に風化しているが、内外面の一部に横方向のハケメがみられる。口径は16.2cmである。19-5は低脚環で、底部径3.8cmを測る。調整は風化により不明である。19-6～8は複合口縁の甕である。19-6は口縁端部を外方へ折り曲げている。19-7は口径14.2cmを測る。口縁端部を外方へ若干折り曲げている。調整は胴部内面に斜め方向のヘラケズリを、外面に縱方向のハケメを、口縁内外面にヨコナデを施している。19-8は口径14.7cmを測る甕で、口縁端部を外方へ折り曲げるものである。

19-9・10は器台である。19-9は器台の脚台部で、内面にヘラケズリ、外面にヨコナデを施す。19-10は器台の筒部で、脚台部内面にヘラケズリを施している。19-3～10は草田編年6期に該当する。SB01は出土遺物から古墳時代前期初頭頃の掘立柱建物跡と考えられる。

## 2.SD01(第20図)

SD01は、SB01の西側に位置する溝である。溝は弧状を呈していて、中央付近の一部は失われている。現状の規模は長さ6.3m、幅40～87cm、深さ15～20cmを測る。埋土は灰色粘質土である。遺物は出土していないため時期は不明だが、SB01より古い溝で草田6期またはそれ以前の溝である。この溝は円形の竪穴建物の壁際溝の可能性も考えられるが、建物の復元に至らなかったためSD01として報告した。



第20図 SD01 実測図

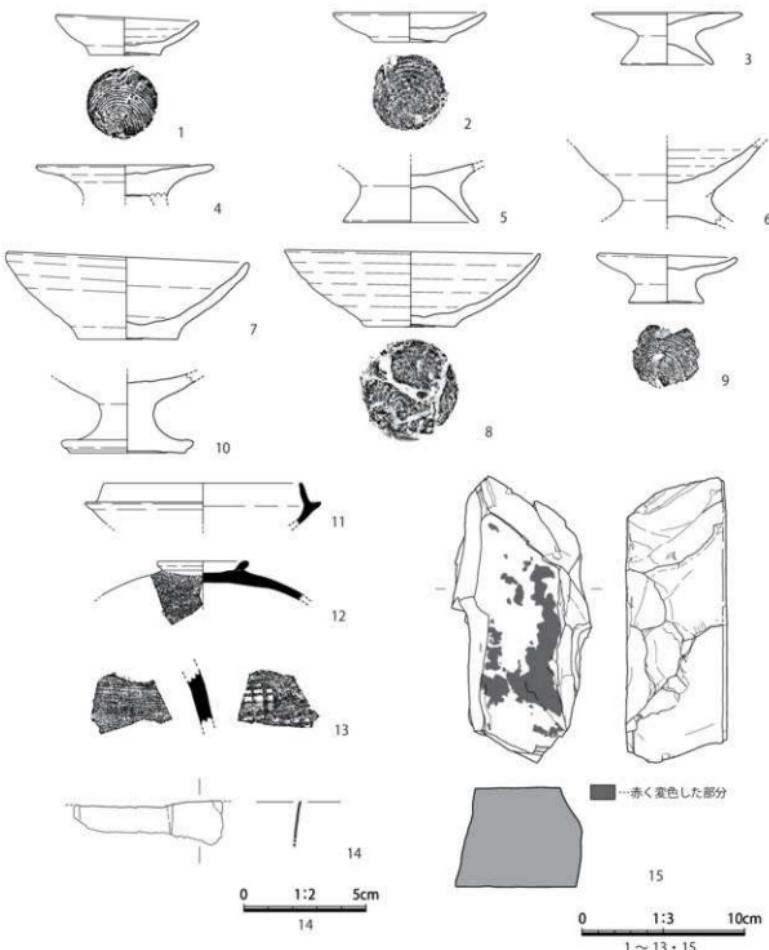
## 第3項 遺構外出土遺物(第21～26図)

本項では、第1遺構面から第2遺構面までの主な土層から出土した遺物を掲載して概要を述べる。掲載する遺物の土層(土層番号・土層名は第9図土層断面に準ずる。)は、第1遺構面の主たる基盤層である55層と出土遺物の多かった62層・75層・88層・95層・97層である。そのなかの75層・88層・95層は出土遺物が多いが、時期差がないことから一括で掲載しており、出土土層は遺物観察表を参照して頂きたい。

## 1.55層出土遺物(第21図)

55層(黒褐色土)は第1遺構面の基盤層である。この土層からは古代から中世前半頃の土師器が多量に出土し、他に古墳時代・古代・中世の須恵器、銅鏡の破片、石製品が出土している。

21-1～10は土師器、21-11～13は須恵器である。21-1・2は皿である。いずれも体部が内湾して立ち上がるるもので、底部は回転糸切り後未調整である。21-1は口径8.8cm、底径4.4cm、21-2は口径9.2cm、底径4.4cmを測る。出雲国府編年第9型式、11世紀後半～12世紀前半である。21-3は高台付



第21図 55層出土遺物実測図

の皿で、底径 5.6cm、器高は 3.2cm を測る。体部も脚部もハの字状に開き、体部の深さは浅い。21-4 は高台付皿と思われる。体部は直線的に外反し、高台は欠損している。21-5 は足高の高台で环と思われる。底径は 8.2cm を測る。21-6 は高台付环である。体部は内湾しながら立ち上がり、脚部は開く。21-3～6 は出雲国府編年第 6～8 型式、9 世紀中葉～12 世紀前半に属するものである。21-7・8 は無高台の环である。いずれも体部はやや丸みを帯びて開くもので、21-8 は底面中央がやや薄い作りである。21-9 は柱状高台付皿である。口径 8.6cm、底径 4.5cm、器高 3.0cm を測る。21-10 は柱状高台付环である。底径 7.2cm、高台の高さは 3.0cm である。外面にわずかに赤色顔料が残存している。いずれも底部は回転糸切り後未調整であるが、風化によりわずかに痕跡が残るのみである。21-7～10 は出雲国府編年第 9～10 型式、11 世紀後半～12 世紀前半に属するものである。

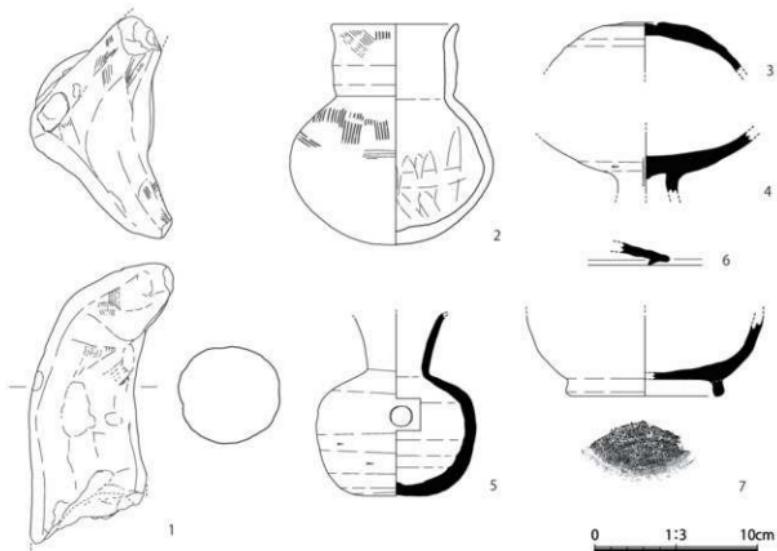
21-11～13 は須恵器である。21-11 は須恵器の环身である。口径 12.2cm、受部径 14.4cm を測り、立ち上がりは低い。出雲 4 期、古墳時代終末頃と思われる。21-12 は輪状つまみの蓋で、口縁端部にかえりが付くものである。出雲国府編年第 1 型式、7 世紀後葉に該当する。21-13 は甕片である。外面に格子状の叩き痕が認められ、内面はナデている。中世の須恵器で、搬入遺物である。21-14 は幅 6.1cm、高さ 1.6cm、厚さ 1mm を測る銅椀の破片である。ほかにもう 1 点同一個体と思われる銅椀の破片が出土しているが接合はしていない。21-15 は長さ 16.0cm、幅 8.3cm、厚さ 6.1cm を測る被熱石材である。石全体に熱を受けており、石材の上面は赤くなっているため錆の可能性が考えられる。また、鍛冶炉跡の近くから出土しているため、金床石の可能性も捨てきれない。

55 層からは古墳時代終末から中世前半の遺物が出土している。なかでも古代後半から中世前半の土師器が多く出土していることから佐太神社と関連する遺物の可能性が高い。また、鍛冶炉跡や椀形鉄滓、被熱石材はそれに関係するものであろうか。

## 2.62層出土遺物(第22図)

第 22 図は 62 層(灰色粘質土)から出土した遺物である。古墳時代の土師器と須恵器、古代の須恵器が出土している。22-1・2 は土師器である。22-1 は上製支脚で、一部破損している。22-2 は口径 7.8cm、器高 13.6cm を測る直口壺である。口縁部は直線的で、端部は外反する。調整は外面にハケメとヨコナデを、内面にヨコナデと指によるナデを施し、外面に朱がみられる。小谷の 3～4 式段階と思われる。22-3～7 は須恵器である。22-3 は环蓋の天井部である。天井部にヘラオコシの痕跡が残り、二周だけヘラケズリを行っている。出雲 4 期と思われる。22-4 は高环の环底部である。切れ目状の透かしが 2 方にみられることから出雲 5～6 期頃と思われる。22-5 は甕である。体部は丸みをもった形態で、外面に刺突文はみられない。出雲 5 期である。22-6 は口縁端部にかえりをもつ蓋である。出雲国府編年第 1 型式、7 世紀後葉に相当する。22-7 は高台付环である。体部は丸みをもって立ち上がり、底部の切り離しは静止糸切り後にナデを施している。底部内面は滑沢であり、他のものに転用した可能性が考えられる。底径 9.4cm を測る。出雲国府編年第 2 型式、7 世紀末葉～8 世紀第 1 四半期である。

62 層から出土した土師器の直口壺は混入品と考えられるが、他の遺物の時期は古墳時代終末から古代前半であり 62 層の時期を示すものと考えられる。

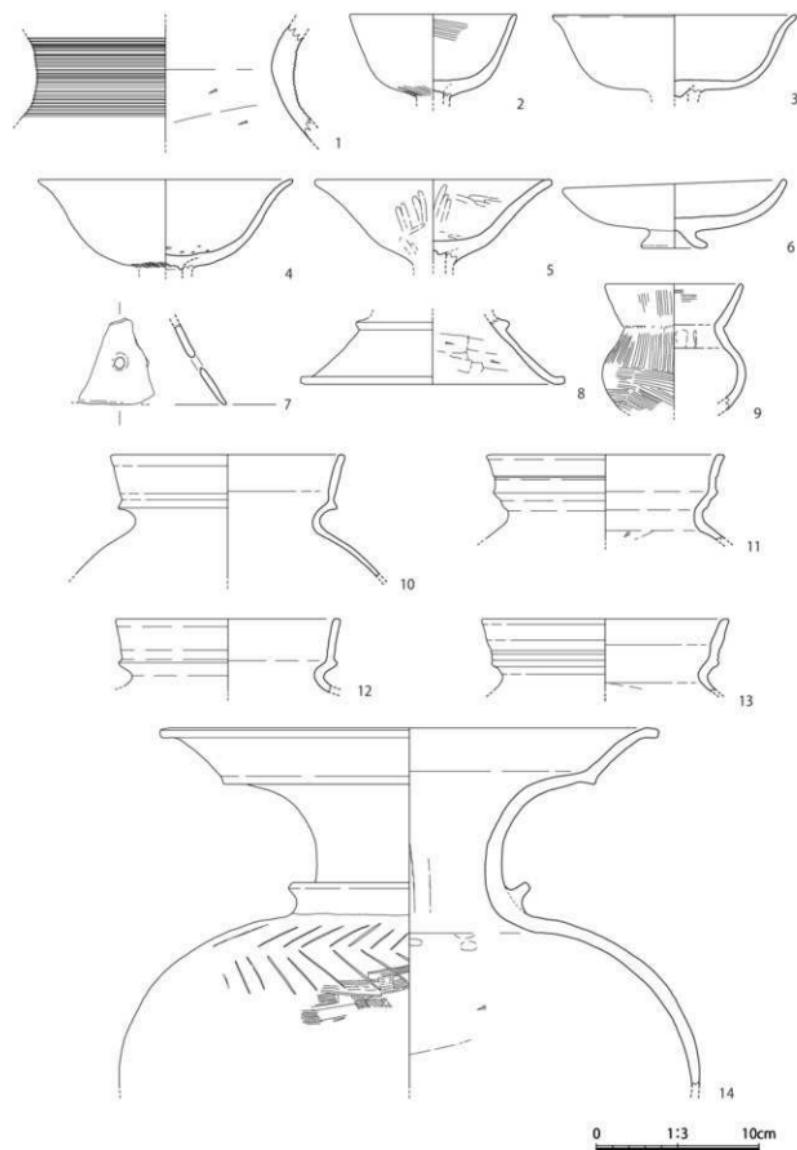


第22図 62層出土遺物実測図

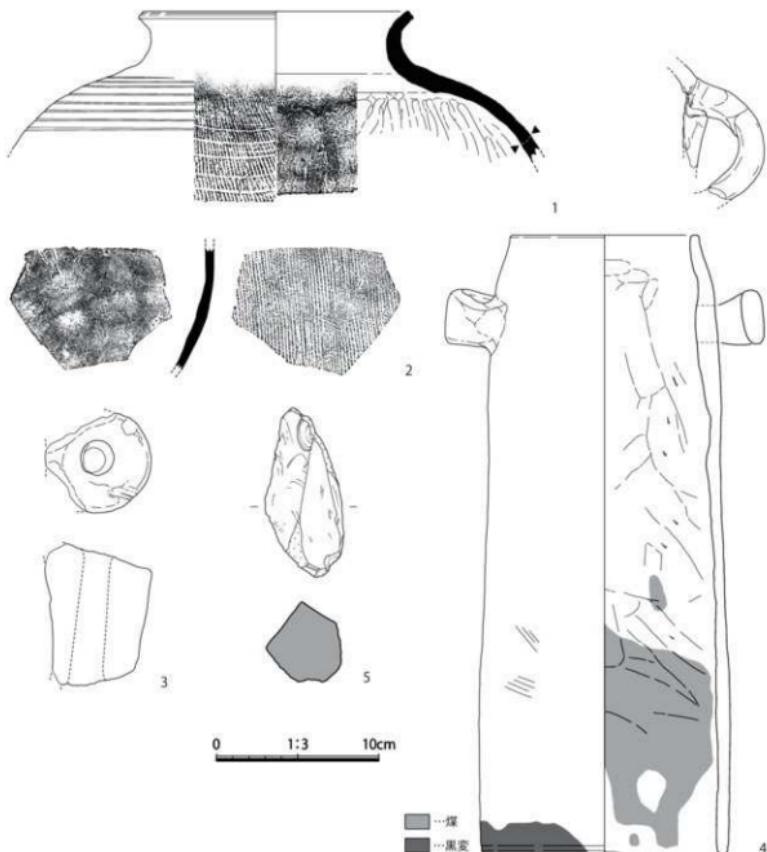
## 3.75層・88層・95層出土遺物(第23・24図)

第23・24図は、75層(にぶい黄褐色土)・88層(灰黄褐色粘質土)・95層(灰黄褐色粘質土)から出土した遺物である。

第23図は弥生土器と土師器である。23-1は弥生土器である。器台の筒部で、外面に櫛描凹線文が描かれている。内面の下半にヘラケズリ、上半にヨコナデを施している。弥生時代終末頃と思われる。23-2～14は土師器である。23-2は高环の环部でやや深い环部を呈し、内外面にハケメを施している。搬入系土器で草田6期である。23-3～5は高环の环部である。23-3は淡橙色を呈し、緩やかなカーブを経て立ち上がり、やや深い环部である。内外面の調整は風化により不明である。草田6期と思われる。23-4は緩やかに立ち上がるもので淡橙褐色を呈する。調整は外面の脚部との接合部分にハケメを、それ以外にヨコナデを施している。外面に漆が付着している。23-5の环部は緩やかに外反し、内外面に丁寧なヘラミガキを施している。灰白色を呈する。23-3～5の环底部には脚部を整形した際の回転軸の痕跡が残る。23-6は草田7期、23-5は小谷3～4式段階である。23-6は淡黄色を呈する低脚环である。口径13.5cm、底径3.5cmを測り、緩やかなカーブをもって立ち上がる。草田7期である。23-7・8は器台である。23-7は小型器台の脚部である。裾が直線的に開くもので、径8mmの円孔が穿たれている。草田7期に該当する。23-8は底径16.2cmを測る鼓形器台である。調整は外面は風化により不明で、内面にヘラケズリを施している。草田7期と思われる。23-9は淡褐色を呈する小型丸底壺である。口縁部はハの字状に開き、体部はやや扁平である。調整は外面に細かいハケ



第23図 75・88・95層出土遺物実測図(1)



第24図 75・88・95層出土遺物実測図(2)

メを施し、体部内面に丁寧なナデを、口縁部にハケメとヨコナデをしている。小谷3～4式段階と思われる。23-10～13は複合口縁の壺である。23-10は口径14.4cmを測る。器壁は薄く、口縁端部はやや外傾する。23-11も器壁が薄い壺で、口径14.6cmを測る。口縁端部は平坦面をもち、端部を折り曲げている。23-12は口縁端部に面をもつもので、口径は13.8cmを測る。23-11・12の外面には漆が付着していた。23-10・11は草田6期、23-12は草田7期である。23-13はやや外傾する口縁部で、稜はにぶく丸みを帯びている。色調は淡黄色を呈しており小谷3式段階と思われる。23-14は口径30.8cmを測る複合口縁の壺である。口縁部は大きく外反して開き、端部に面をもたせる。頸部には突帯が廻り、その下側の肩部に羽状文を施している。小谷3式段階である。

24-1は、朝鮮半島製の古式の陶質土器である。純席文打捺短頸壺と呼ばれる器種で、単純口縁の

とうせきもんがなづ

端部に面をもち、復元すると最大径が胴部中位にくるものである。内外面ともに赤褐色を呈しており、赤焼きで還元はしていないが作りは硬くしっかりしている。胴部外面は縄蓆文を施したのち、幅1mmの沈線を1cm程度の間隔で施している。胴部内面は当て具痕を消すように縦方向にナデを行っている。また、胴部内面には円形状の指で押されたような凹みもみられる。短い口縁部の内外面にはナデを行い、端部はナデにより凹状になっている。この陶質土器は、朝鮮半島南部の咸安の土器で、時期は4世紀後半頃である。咸安の陶質土器は壺の胴部下半と胴部上半から口縁部の2個体を作り、それを接合して当て具と叩きにより成形を行う。断面にはこの接合の痕跡が明瞭にみられる。24-2は24-1と同一個体の破片である。やや明るい褐色を呈し、胴部下半と思われる。外面に縄蓆文、内面に横方向のナデを施している<sup>29</sup>。24-3は紐穴付土器の紐穴の部分と思われる。高さ8.7cm、幅6.3cm、穴径2.0cmを測り、灰白色を呈する。24-4は把手付円筒土器である。口径11.6cm、底径15.2cm、器高43.0cmを測り、淡黄色を呈する。底部外面に1条の沈線が廻り、口縁部近くに径8.0cm、幅3.2cm、厚さ1.6cmの把手を横に付ける。この把手は体部に開けられた穴に挿入して接合している。調整は外面に丁寧なナデを、内面にヘラケズリを施している。内面下半に煤が付着し、下端は一部黒変している。24-5は灰白色を呈する砥石である。キメが細かいもので、仕上げ用と思われる。75・88・95層の遺物は弥生時代終末から古墳時代前期である。

#### 4.97層出土遺物(第25図)

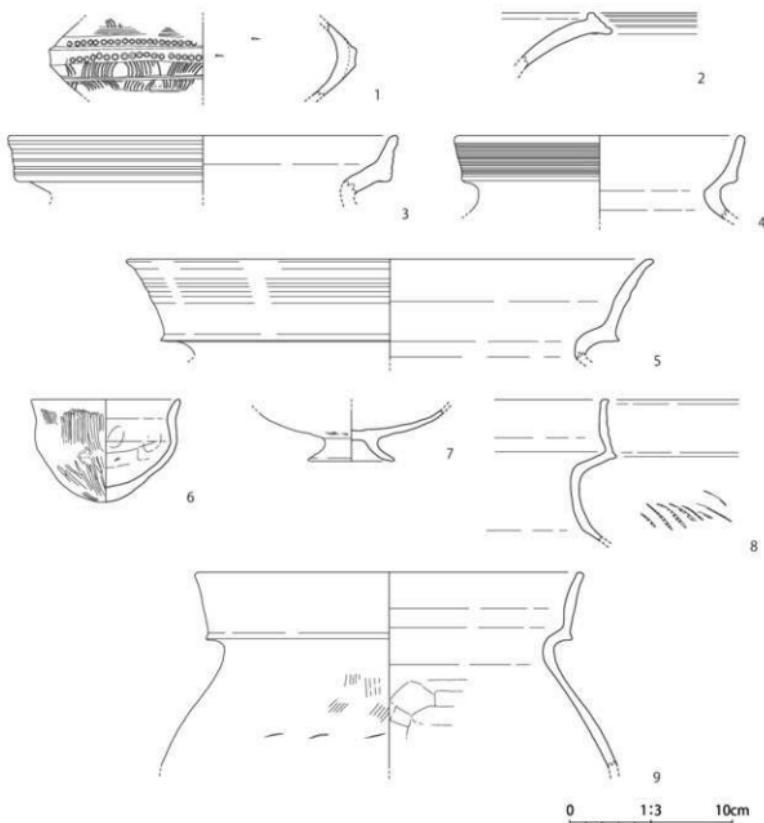
97層からは弥生時代中期から古墳時代前期初頭の土器が出土している。

25-1～5は弥生土器、25-6～9は土師器である。25-1はスタンプ文土器で胴部に突帯がめぐり、突帯の上下が突出している。外面に竹管による円形の刺突文と半裁竹管によるC字状文で装飾を施している。草田2期である。25-2は壺の口縁部で口縁が外反して大きく開くものである。端部が肥厚して外側に平坦面をもち、凹線文が施されている。松本編年IV-1様式に属するものである。25-3は甕の口縁部である。口縁外面に擬四線文がみられ、草田2期である。25-4の甕は、上方へ引き上げた口縁外面にヘラによる擬四線文を描いている。草田3期である。25-5は口径32.4cmを測る複合口縁の甕である。薄く引き出したような口縁部をもち、その端部は丸くおさめているが、軽く外方に折り曲げている。草田5期である。25-6は小型丸底鉢である。口径9.1cm、器高6.3cmを測り、口縁部は短くやや外反する。調整は外面に細かなヘラミガキを施し、一部にハケメもみられる。内面にはヘラケズリと指頭圧痕がみられる。25-7は底径5.4cmを測る低脚杯で、淡黄色を呈する。25-8は壺で口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部をやや外方に曲げている。頸部外面には貝殻復線による刺突痕がみられる。25-9は複合口縁の甕である。口縁部はわずかに外反し、端部を外方に軽く折り曲げている。肩部にはハケメを行い、間の広い列点文を施している。25-6～9は草田6期である。

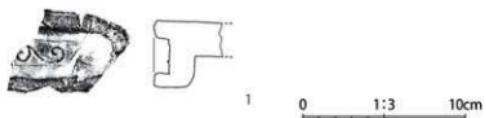
#### 5.層位不明出土遺物(第26図)

第26図には層位不明の出土遺物として軒平瓦を掲載した。この瓦はC-C'土層断面の畦が崩落した際に検出した瓦で層位は不明であるが、今回の調査が佐太神社境内であることやこれまでに行われた佐太前遺跡の調査においても中近世の瓦が出土していることから、中近世の佐太神社に関連する一資料として掲載した。

26-1は軒平瓦の右端片である。瓦当の高さ4.1cm、外縁は高さ0.9cm、脇幅1.8cmを測る。内区の  
圈線の内側に唐草紋がみられ、2010年に行われた佐太前遺跡の調査で同様な瓦が出土していること  
から16世紀後半頃の瓦と思われる。<sup>(4)</sup>



第25図 97層出土遺物実測図

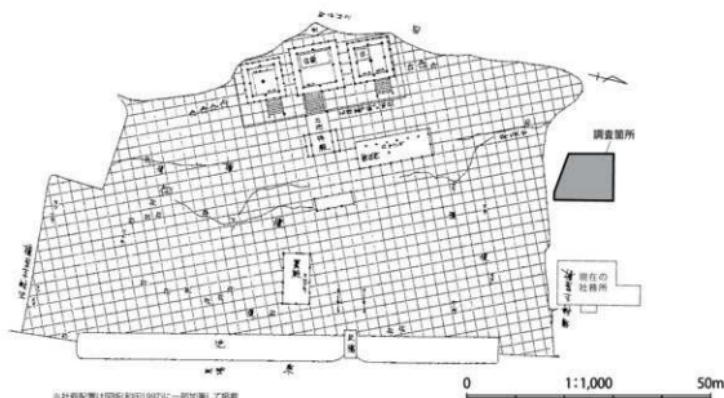


第26図 層位不明出土遺物実測図

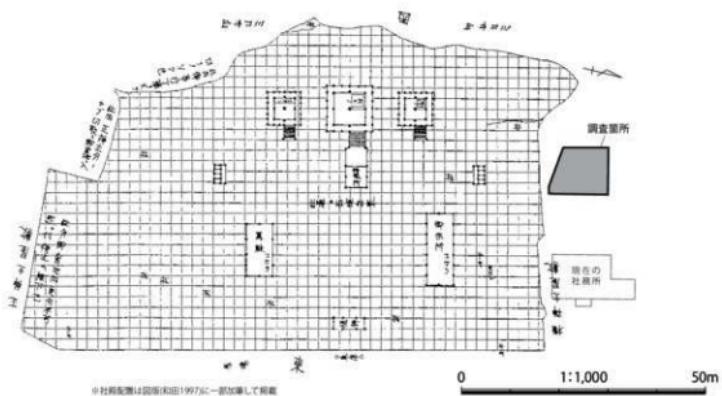
## 第4章 総括

佐太前遺跡・佐太神社神宮寺跡は佐太神社の北摂社の北側に位置する。

ここであらためて佐太神社について述べると、佐太神社は、『出雲国風土記』では秋鹿郡の条に「佐太御子社（佐太太神の社）」として名前がみえる。神仏習合の時代には薬堂・經所・常楽寺などの仏教施設も設置され、それもあって中世には「佐陀神社」と称された。近世初頭には仏教色を廃した。平成19(2007)年の佐太前遺跡の調査では瓦が多く出土し、仏教施設の存在も裏付けられた。また、昭和15年の境内の賽路整備の際には昭和13年に建設された社務所の裏側に当たる場所、旧護摩堂背



第27図 佐太神社社殿配置（貞享期以前）と調査区・社務所の位置関係



第28図 佐太神社社殿配置（貞享期）と調査区・社務所の位置関係

後に位置する鐘楼跡から鰐口が発見されている。この鰐口の出土地は本調査区の近くと考えられ、本調査地周辺に神宮寺に係わる施設が存在した可能性は考えられる。

では、本調査地は佐太神社に残る指図ではどのあたりに位置するのか。佐太神社には江戸時代の貞享期以前と以後の指図が残存しており、社殿配置が記されている。貞享以前の社殿配置は主軸を E - 36° - N にとり、敷地の南端に位置している。貞享期(1684年～1687年)以後では主軸を E - 25° - N にとり、やや貞享期以前より東側に位置している。文化期(1804年～1817年)以降も貞享期以後ほぼ同一の主軸と配置であり、基本的にこの配置は現在まで引き継がれている。現状の社殿位置と貞享期以後の指図を重ねてそこに本調査区と社務所を当てはめた図が第28図、貞享期以前に当てはめた図面が第27図である。この図面をみると、本調査区は指図の範囲外に位置していることがわかる。

今回調査を行った範囲はこの指図の範囲外ではあるが、以下では調査成果から第1節で時期毎に遺構・遺物について述べ、第2節で佐太前遺跡周辺の集落跡について述べる。

## 第1節 遺構・遺物

### 1.弥生時代終末～古墳時代前期(第2遺構面)

古墳時代前期の遺構は掘立柱建物跡(SB01)である。桁行2間、梁行1間以上の建物跡で、溝を伴うことから布掘建物跡と考えられる。また、SB01の西側の溝(SD01)は遺物がないため時期はわからないが、SB01との切り合い関係からSB01より古いと考えられる。周辺には他にも多くの柱穴がみられるため、建物の復元はできなかったが堅穴建物に伴う壁際溝の可能性も考えられ、溝が円形であることから弥生時代から古墳時代前期頃の建物が想定される。遺構面ではほかにも多くの柱穴を検出しており、検出状況をみると南北方向に柱穴が並んでいるようにみえることから、桁行を南北とする建物があった可能性が考えられる。

土器は弥生時代終末から古墳時代前期の土器が多く出土している。特に草田6期の土器が多く、第2遺構面上の包含層(75・88・95・97層)から出土した遺物に占める割合も圧倒的にこの時期の比率が高い。遺物は甕や器台、低脚壺のほか搬入遺物と考えられる脚付の壺または鉢がみられ、対外交流が窺われる。

これまでに行われた佐太前遺跡の調査成果から弥生時代前期以後の集落が確認されており、今回のSB01やSD01はその一端を調査したものと考えられる。佐太前遺跡周辺の集落については第2節で述べる。

### 2.古墳～中世(第1遺構面～第2遺構面中間層)

調査区南壁と東壁の土層断面(第9図)をみると、第1遺構面下から第2遺構面の地山までの断面に柱穴や土坑と思われる落ち込みが多数確認される。土層断面55層は第1遺構面の基盤層である。硬く締まりのある土層で人為的に固化された造成土と考えられる。その下層の56～104層は自然堆積土や遺構埋土である。遺構の多くは土層断面62層・75層・97層・103層上面から掘り込まれたものが多く確認され、これらの土層上面は遺構面の可能性が考えられる。

遺構面については調査期間に制約があったため調査を行っていないが、各土層から出土した遺物の時期から概ね遺構面の時期を推定することができる。主な土層の出土遺物をみると、62層からは古墳時代の終末から古代前半の土師器や須恵器が出土しており、遺物の下限の時期からすると62層を基盤とする遺構面は古代前半以降と思われる。75層・88層・95層からは弥生の終末から古墳時代前期の土器が、97層からは弥生時代中期から古墳時代前期の土器が出土している。遺物の多くは古墳時代前期、特に草田6期の甕・壺・低脚壺・器台・高壺などが出土している。そのなかには畿内や朝鮮半島から搬入された土器が確認され、なかでも注目されるのは朝鮮半島南部、咸安の陶質土器である。繩席文打捺短頸壺と呼ばれる土器で、赤褐色を呈し、外面に繩席文が施されている。時期は4世紀後半である。朝鮮半島製の土器は、2009年に行われたマンホール設置工事に伴う工事立会においても同様な破片が出土している。この破片は外面に繩席文が施されたものであるが、色は灰色を呈しているため本遺跡出土のものとは別個体と思われる。

朝鮮半島製の土器は出雲西部の中野清水遺跡や上長浜貝塚遺跡で確認されている。中野清水遺跡は斐伊川西岸に所在する遺跡で、包含層から朝鮮半島系の壺の胴部片が6点出土し、いずれも青灰色を呈するもので、外面に繩席文と沈線を、内面に横や縱方向のナデを施している。上長浜貝塚は斐伊川と神戸川により生成された出雲平野の海岸砂丘地に所在する。包含層から出土した陶質土器は、口縁部から胴部下半までが残存しており、口径18cm、色調は淡青灰色を呈する。胴部外面に繩席文を施したのち、横方向に多条の沈線を描いている。いずれの土器の時期も4世紀後半と考えられている。この2遺跡では陶質土器のほかに搬入系遺物と考えられる鉢やスタンプ文土器が出土しているため、他地域との交流が窺える遺跡である。いずれも川や海の近くに立地した遺跡で水上交通を利用した拠点集落である。

### 3.中世～近世(第1遺構面)

中世～近世の遺構は池(SG01)・井戸(SE01)・鍛冶炉跡・柱穴である。SG01やSE01は出土遺物から近世末頃に埋まったと考えられる。佐太神社の朝山宮司の口伝によれば社務所の裏側あたりに2畳にも満たない池があったようであるが、大きさからすると今回検出した池とは異なるように思われる。

調査区東側で検出した鍛冶炉跡は基盤層の出土遺物の時期から12世紀以降、中世前半以降と考えられる。楕円鉄滓や被熱石材が出土していることから佐太神社の境内において鍛冶が行われていたと考えられる。令和2年8月に松江市が行った佐太神社舞殿の改修・移転工事に伴う調査でも、複数の焼土跡が検出された。特に炭化物を多く伴うものからは鍛造剝片も採取されており、簡易な鍛冶炉跡であると考えられている。社殿や舞殿の改修等に際して、現地で必要な鉄製品の鍛造を行っていたことが推測される。

また、同じ基盤層から柱穴を検出しているため中世以降の建物が存在した可能性は高い。先に述べたように近くから飼口が出土していることもあり、建物の復元には至らなかったが神宮寺に関連する建物の柱穴の可能性は考えられる。

遺物は、SG01・SE01から陶器・瓦・石製品・木製品が出土している。これらの遺物は遺構が埋

まる際に混入したものであるが、瓦のなかには16世紀末のコピキAの糸切り技法がみられるものがある。また出土土層不明だが16世紀後半頃の軒平瓦も出土している。2007年～2009年に行われた佐太前遺跡の発掘調査でも本調査区東側に位置するG区(第29図参照)から多くの瓦が出土しており、中世佐陀神社に付随する神宮寺跡の痕跡を示すものである。今回出土した16世紀後半や末の瓦は神宮寺に伴う可能性はある。

第1遺構面の基盤層55層には多くの古代末から中世前半の土師器が多く混入していた。土質から人為的な造成土と考えられ、柱穴がみられることからなんらかの建物は想定される。時期的には神仏習合の時期であり本調査区に神宮寺に伴う建物が存在した可能性は考えられる。

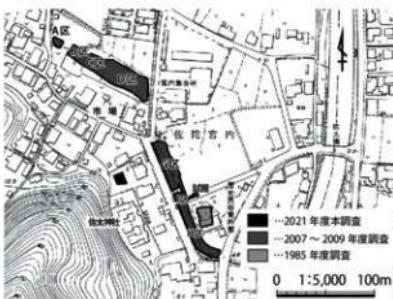
## 第2節 佐太前遺跡周辺の集落跡(第29・30図)

第2章で述べたように鹿島町には多くの遺跡が所在している。本節では鹿島町における集落遺跡について触れてみたい。

まず、今回の調査地である佐太前遺跡は1985～1986年と2007～2009年に調査が行われている。この2遺跡の概要を述べると、1985～1986年に行われた調査では2面の遺構面が確認されている。古代から中世の遺構面と弥生時代から古墳時代の遺構面が検出され、掘立柱建物跡や土坑、溝などの多くの遺構とともに弥生土器や土師器、輸入陶磁器や肥前系の陶器などが出土している。2007～2009年に行われた調査では、佐太神社北側C・D区で縄文時代の自然流路や弥生時代前期後葉の大溝が確認され多くの遺物が出土している。また、佐太神社東側のG区では2面の遺構面が確認され、中世から近世の掘立柱建物跡や柱穴列が、弥生時代後期から古墳時代初めの竪穴建物跡や掘立柱建物跡、土坑が検出された。遺構内や土層から大量の弥生土器や土師器が出土しており、調査地及び周辺は拠点集落と考えられている。

これまでの佐太前遺跡の調査成果をみると弥生時代前期から近世まで集落が営まれ、出土遺物からすると弥生時代後期から古墳時代前期に集住が認められる。これまでにも佐太前遺跡では畿内系や朝鮮半島製の土器が出土しているため他地域との交流があったことは周知の通りであり、他地域との流通においても一大拠点であったと考えられる。佐太前遺跡の集落の中心地は周辺の地形からは、本遺跡の北西側に現在の佐陀宮内の市場(第29図参照)と呼ばれる集落が位置する微高地があり、佐太前遺跡の集落の本体はこのあたりと考えられている。したがって本調査地は佐太前遺跡の集落の西辺にあたると思われる。

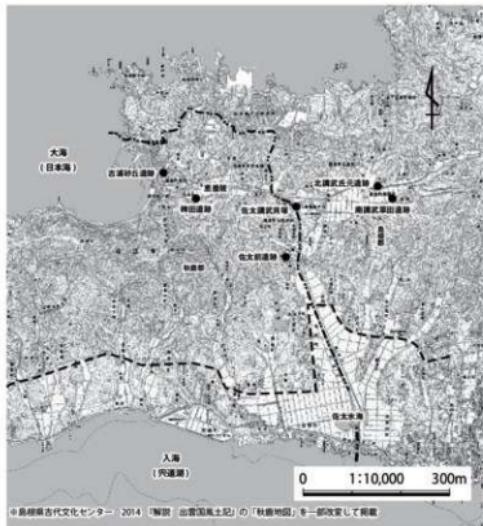
佐太前遺跡以外に目を向けると、佐太講武貝塚で縄文時代晚期前半の人々の生活が確認され、朝鮮半島に系譜のある列孔文土器が出土していることから縄文時代から朝鮮半島との交流が窺われる。北講武氏元遺跡は突堤文



第29図 佐太前遺跡発掘調査位置図

を伴う弥生時代前期の集落である。佐太前遺跡はこれに後続する集落で、弥生時代前期後半に拠点集落として成立したものと考えられる。ほかに南講武草田遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡が検出されている。これらの遺跡からは多くの弥生土器や土師器が出土しており、そのなかに搬入系の土器や朝鮮半島製の土器が出土している。

佐太前遺跡が立地する場所はかつて日本海側に恵晏陂が、穴道湖側に佐太水海という水域の分水嶺であった。内海と外海を結ぶ場所に位置する佐太前遺跡は流通や交流の中心地であり、多くの人々が佐



第30図 佐太前遺跡周辺の集落遺跡

太前遺跡及び周辺で生活を営んでいた。恵晏陂に位置する稗田遺跡で船材が出土していることや、古浦砂丘遺跡の墓地群が「渡来系」の弥生人の墓と考えられていること、そしてこれまでの遺跡の調査成果をみると、鹿島町に所在する遺跡は他地域との交流が活発であったことを示している。

### 第3節 結語

今回の調査では、古墳時代前期の建物跡や溝、古代末から中世前半の鍛冶炉跡、近世の土坑などが検出された。遺物は調査範囲に対して非常に多く、弥生時代から近世までのものが出土している。

調査地は、これまでに行われた佐太前遺跡の谷底の調査とは異なり、佐太神社境内の丘陵裾部にある。従来考えられていた集落の本体部分の調査であり、限られた範囲ではあるがその集落の一端を垣間見ることができた。弥生時代前期に形成された集落は对外交流や交易を行う拠点集落として安定して営まれ、その後、佐太神社が建立されてからは佐太神社を中心として古代・近世を通じて現在に至るまで連綿と人々の生活が受け継がれてきた様子が窺われる。さらに、神宮寺に直接関連する遺構は確認できなかったが、佐太神社境内における変遷を垣間見ることができた。

今後の調査事例の積み重ねにより、当地の様相がより一層解明されることを期待したい。

### 【註】

- (1) 瓦の原材料となる粘土板を粘土塊から切り離す際に攢り糸を使って切り離す技法(糸切り技法)をコビキ A といい、瓦の凹面に攢り糸がスライドした粗い斜め方向の痕跡が残る。また、コビキ B は鉄線を使って切り離す技法(鉄線切り技法)で瓦の凹面に鉄線がスライドした滑らかな水平方向の痕跡が残る。16世紀末頃にコビキ A からコビキ B に変化する。
  - (2) この建物基礎は近世以降の遺構である SG01 や SE01 の埋土を切っているため、新しい時期の遺構と考えられることから写真撮影のみを行った。
  - (3) 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 松永 悅枝氏のご教示による。
  - (4) 花谷浩氏が『松江市歴史叢書10』「出雲における中世の瓦と松江城築城期の瓦」2017年のなかで佐太前遺跡から出土した瓦を掲載しておられる。そのなかの図2-6の軒平瓦は今回出土した軒平瓦と似ているため16世紀後半と考えられる。
  - (5) 神仏習合の明確な時期は定かではないが、井上寛司氏は『重要文化財 佐太神社・佐太神社の総合的研究』「中世佐太神社の構造と特質」のなかで「個々の祭神の本地仏を祭る仮教施設を神社の境内ないしその周辺に設け、そこに僧侶が住んで神宮寺の運営に当たるという体制は、佐陀神社のみならず奈良末・平安期以後各地において広く見られたところであって、佐陀神社の神宮寺が具体的にいつ成立したのかは明らかではないが、少なくとも中世佐陀神社の成立期にはこうした体制も整っていたと考えるべきものであろう」と述べておられる。
- 佐陀神社の神宮寺は各祭神の本地仏を祭るために設けられた仮教施設で、明応4年の佐太社縁起では神宮寺について記載されている。

### 【参考文献】

- 井上寛司 1997年 「中世佐陀神社の構造と特質」『重要文化財 佐太神社－佐太神社の総合的研究』
- 和田嘉有 1997年 「佐太神社の本殿形式と配置構成に関する考察」『重要文化財 佐太神社－佐太神社の総合的研究』
- 出雲市教育委員会 1996年 『上長浜貝塚』
- 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会 2005年 『中野清水遺跡(2)』
- 島根県鹿島町教育委員会 1987年 『佐太前遺跡』
- 島根県教育委員会 2003 『史跡出雲国府跡-1-』
- 松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 2010年 『広岡川河川改修事業に伴う佐太前遺跡発掘調査報告書』
- 花谷浩 2017年 「出雲における中世の瓦と松江城築城期の瓦」『松江市歴史叢書10』
- 坂 靖・青柳泰介 2011 『葛城の王都・南郷遺跡群』
- 兵庫県教育委員会 2002 『上脇遺跡』
- 大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会 1990 『陶邑・伏尾遺跡-A地区-』

## 遺物観察表

## 土器(1)

遺物 番号	通称名	種類	器種・部位	古墳 (cm)			調整・文様の特徴		色調・装飾	備考
				口径	底径	高さ	調整・手法・文様	施土・焼成		
7-1	試掘	陶器	瓶	(10.5)	—	(2.0)	外 透空手 内 三重網繩	施土 密 焼成 良好	内面染付	中国青花 16c 後半～17c 初め頃
7-2	試掘	縦前陶器	甕	—	—	(8.9)	外 ナデ 内 ナデ	施土 密 焼成 良好	外 開白色 内 灰褐色	近世以降だが時期不明
12-1	SGO1	陶器 盃状壺	鉢	(19.4)	—	(4.5)	外 一 内 一	施土 密 焼成 良好	青磁釉	17c 初め頃 (江戸の初期) 池の下削
12-2	SGO1	肥前系陶器	鉢	—	(22.5)	(15.4)	外 楠目文 内 梶子格子状のタタキ編	施土 密 焼成 良好	内外面 縁部 無釉	時期不明 池の下削
12-3	SGO1	陶器 布志名模	鉢	(28.0)	—	(5.0)	外 一 内 一	施土 密 焼成 良好	内外 緑色	口縁部は玉縁 19c 前半 池の上削
12-4	SGO1	陶器 施瓦窓	青磁碗	—	—	(4.2)	外 楠底付文 内 一	施土 密 焼成 良好	青磁釉	16c 前半～中頃 池の上削
12-5	SGO1	肥前系磁器	高台付付の 耳縁付か鉢	—	—	(1.1)	外 丸文 内 圆腹	施土 密 焼成 良好	白磁	時期不明 池の下削
12-6	SGO1	肥前系磁器	丸鉢	—	(4.5)	(3.0)	外 丸文 内 圆腹	施土 密 焼成 良好	染付	九陶V期 (1780～1810年) 池の下削
12-7	SGO1	肥前系磁器	碗	(9.2)	—	(3.7)	外 有 内 繰引きの文様	施土 密 焼成 良好	染付	九陶V期 (1780～1810年) 池の下削
12-8	SGO1	肥前系磁器 波足浅鉢	皿	(13.2)	(6.6)	3.0	外 斧付は無脚 内 口縁部に唐草文	施土 密 焼成 良好	内面染付	九陶V～4期 (1820～1860年) 見込みに蛇の目軸引ぎ
16-1	難治切跡 土師器	土師器	高台付環か鉢	—	(7.6)	(2.8)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	施土 密 焼成 良好	黄褐色	出雲国府編第6～8型式 (9c 中葉～11c 前半)
19-1	SB01	弥生土器	甕の頭部	—	—	(7.3)	外 斧付は無脚 内 口縁部に唐草文	施土 1mm前後の砂粒 を含む 焼成 良好	灰白色	弥生時代中期 松本編年Ⅲ-1様式
19-2	SB01	弥生土器	邊か腰の側部	—	—	(8.4)	外 波状文、糸点文、 直線文 内 ヨコナデ、ハラケズリ	施土 石片・長石 を含む 焼成 良好	外 淡褐色 内 淡褐色	弥生時代終末頃
19-3	SB01	土師器	御付の邊か鉢	頭部付 (7.0)	脚部付 (8.4)	(4.1)	外 ヨコナデ、ハケヌ 内 ヨコナデ、ハケヌ	施土 石片・長石 を含む 焼成 良好	外 明褐色 内 黒褐色	近畿系 草田6期
19-4	SB01	土師器	高环	(16.2)	—	(4.5)	外 ヨコナデ、ハケヌ 内 ヨコナデ、ハケヌ	施土 1mm以下の長石 を含む 焼成 良好	淡褐色	草田6期
19-5	SB01	土師器	低脚环	—	—	3.8 (2.3)	外 ナデ 内 瓜化	施土 1mm以下の長石 を含む 焼成 良好	外 灰白色 内 淡褐色	草田6期
19-6	SB01 (SP03)	土師器	甕	—	—	(3.1)	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	施土 0.5mm以上の砂 を含む 焼成 良好	外 淡黑色 内 灰褐色	複合口縁 草田6期
19-7	SB01	土師器	甕	—	(14.2)	—	外 ヨコナデ、縦方向のハ ケヌ 内 ヨコナデ、ハラケズリ	施土 1mm前後の石英・ 長石を多く含む 焼成 良好	外 灰褐色～褐色 内 褐色～白褐色	複合口縁 草田6期
19-8	SB01	土師器	甕	—	(14.7)	—	外 ヨコナデ、ハケヌ 内 ヨコナデ、ハラケズリ	施土 1mm前後の砂粒 を含む 焼成 良好	褐色	複合口縁 草田6期
19-9	SB01	土師器	器台の脚台部	—	(15.6)	(4.1)	外 ヨコナデ 内 ハラケズリ	施土 1mm前後の砂粒 を含む 焼成 良好	淡赤褐色	草田6期
19-10	SB01	土師器	跳形器台の 脚部	—	脚部付 (11.0)	(5.5)	外 ヨコナデ 内 ハラケズリ	施土 1mm前後の砂粒 を含む 焼成 良好	褐色	草田6期
21-1	55層	土師器	皿	8.8	4.4	2.3	外 回転ナデ 内 回転ナデ 回転ナデ 切込	施土 1mm前後の砂粒 を含む 焼成 良好	外 赤褐色 内 棕褐色	出雲国府編第9型式 (11c 後半～12c 前半)
21-2	55層	土師器	皿	(9.2)	—	4.4	外 回転ナデ 内 回転ナデ 回転ナデ 底部	施土 少なく無釉 焼成 良好	褐色	出雲国府編第9型式 (11c 後半～12c 前半)
21-3	55層	土師器	高台付皿	(9.2)	(5.6)	3.2	外 ナデ 内 瓜化	施土 粗粒で無釉 焼成 良好	明赤褐色	出雲国府編第6～8型式 (9c 中葉～11c 前半)
21-4	55層	土師器	高台付皿	(10.9)	—	(1.9)	外 回転ナデ 内 瓜化	施土 少なく無釉 焼成 良好	外 棕褐色 内 灰白色	出雲国府編第6～8型式 (9c 中葉～11c 前半)
21-5	55層	土師器	高台付环	—	(8.2)	(3.6)	外 回転ナデ 内 回転ナデ 底部	施土 粗粒を含む 焼成 良好	淡黄色	出雲国府編第6～8型式 (9c 中葉～11c 前半)
21-6	55層	土師器	高台付环	—	—	(4.9)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	施土 粗粒を含む 焼成 良好	褐色	出雲国府編第6～8型式 (9c 中葉～11c 前半)
21-7	55層	土師器	無高台环	15.0	6.2	5.1	外 回転ナデ 内 回転ナデ	施土 1mm前後の砂粒 を含む 焼成 良好	灰白色～褐色 内 淡褐色	出雲国府編第9～10型式 (11c 後半～12c 前半)
21-8	55層	土師器	無高台环	15.7	5.6	4.6	外 回転ナデ 内 回転ナデ 底部 回転ナデ 切り取	施土 1mm前後の砂粒 を含む 焼成 良好	灰白色～褐色 内 淡褐色	出雲国府編第9～10型式 (11c 後半～12c 前半)
21-9	55層	土師器	柱状高台付皿	8.6	(4.5)	3.0	外 回転ナデ 内 瓜化 底部 回転ナデ 切り取	施土 1mm前後の砂粒 を含む 焼成 良好	褐色	出雲国府編第9～10型式 (11c 後半～12c 前半)
21-10	55層	土師器	柱状高台付环	—	(7.2)	(4.9)	外 ナデ、赤色顔料 内 ナデ、赤色顔料 底部 回転ナデ 切り取	施土 粗粒を含む 焼成 良好	外 淡褐色 内 灰白色	出雲国府編第9～10型式 (11c 後半～12c 前半)

## 土器(2)

遺物 番号	遺構名	種類	器種・部位	法面(cm)			調整・文様の特徴		色調	備考	
				口徑	底径	高さ	調整・手法	施土・焼成			
21-11	55層	須恵器	环身	(12.2) 受部付 (14.4)	—	(2.5)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	施土 焼成 良好	1cm前後の砂粒を含む 焼成 良好	灰白～灰褐色 内 白色	出雲4期 古墳時代終末頃
21-12	55層	須恵器	輪状つまみの 蓋	—	—	(2.5)	外 回転ナデ、ヘラカツリ 内 回転ナデ後不定方向の ナデ	施土 焼成 良好	砂粒を含む 焼成 良好	灰白 内 灰色	出雲国府編第1型式 (7c後葉)
21-13	55層	須恵器	蓋	—	—	(3.5)	外 積子状のタキ麻 内 ナデ	施土 焼成 良好	砂粒を含む 焼成 良好	灰褐色	織入系土器、中世
22-1	62層	土師器	土支脚	最大長 (14.8)	最大幅 (7.0)	最大厚 6.0	ハケ後ナデ消し	施土 焼成		淡黄色	
22-2	62層	土師器	直口壺	(7.8)	—	13.6	外 ヨコナデ、ハケメ、朱 内 振てナデしひ後、軒くヨ コナデ	施土 焼成 良好	1cm前後の砂粒を含む 焼成 良好	赤褐色	小谷3～4式P陶 赤色顔料
22-3	62層	須恵器	环唇の天井部	—	—	(3.0)	外 回転ナデ、ヘラカツリ、 ヘラオコの振跡 内 ナデ	施土 焼成 良好	砂粒をわずかに 含む 焼成 良好	灰褐色	出雲4期
22-4	62層	須恵器	高环の环底部	—	—	(3.8)	外 ナデ、2方向に 引け目状の凹痕 内 回転ナデ、静止ナデ	施土 焼成 良好	1cm以下の砂粒 を含む 焼成 良好	灰褐色	出雲5～6期
22-5	62層	須恵器	縁	—	40	(11.2)	外 ハラカツリ、クリヤ後 ナデ、回転ナデ 内 回転ナデ	施土 焼成 良好	1cm前後の白い砂 粒を含む 焼成 良好	灰褐色	出雲5期
22-6	62層	須恵器	蓋	—	—	(1.9)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	施土 焼成 良好	砂粒を少量含む 焼成 良好	灰褐色	出雲国府第1型式 (7c後葉)
22-7	62層	須恵器	高台付环	—	(9.4)	(4.9)	外 回転ナデ 内 静止ナデ 底	施土 焼成 良好	砂粒を含む 焼成 良好	灰褐色	牟田品か 出雲国府編第2型式 (7c末葉～8c第1四半期)
23-1	88層	弥生土器	腰台の筒部	—	—	(7.1)	外 番櫛凹縫文、ナデ 内 ヨコナデ、ヘラカツリ	施土 焼成 良好	石英、長石、颗粒を含む 焼成 良好	灰褐色 内 白色	弥生時代終末頃
23-2	88層	土師器	高环の环部	(10.2)	—	(5.2)	外 ハケメ 内 一部ハケメがみられる	施土 焼成 良好	1cm前後の石英、 砂粒を多く含む 焼成 良好	淡褐色 内 淡灰色	草田6期 織入系土器(近畿庄内式)
23-3	75層	土師器	高环の环部	(15.0)	—	(5.1)	外 風化 内 風化	施土 焼成 良好	1cm前後の石英、 砂粒を多く含む 焼成 良好	淡褐色 内 淡褐色	草田6期
23-4	88層	土師器	高环の环部	(15.5)	—	(5.5)	外 ヨコナデ、ナナメ方向の ヨコナデ 内 ヨコナデ、ナナメ	施土 焼成 良好	石英、長石颗粒を含む 焼成 良好	淡褐色	草田7期 外面に漆がみられる
23-5	95層	土師器	高环の环部	(14.6)	—	(5.1)	外 ヨコナデ、ヘラミガニ 内 ヨコナデ、ヘラミガニ	施土 焼成 良好	砂粒 焼成 良好	灰褐色	小谷3～4式四隅
23-6	95層	土師器	低脚H	13.5	3.5	3.9	外 風化 内 風化	施土 焼成 良好	細かい長い長石、 石英を含む 焼成 良好	淡黄色	草田7期
23-7	86層	土師器	小型腰台の 脚部	—	—	(5.0)	外 風化 内 風化	施土 焼成 良好	1cm前後の長石、 石英を含む 焼成 良好	淡褐色 内 淡褐色	草田7期 目8mmの円孔あり
23-8	75層	土師器	鉢形腰台	—	(16.2)	(4.1)	外 ヨコナデ、風化 内 ヘラカツリ、しづら縄、 ナデ	施土 焼成 良好	1cm前後の長石、 石英を含む 焼成 良好	灰褐色 内 淡褐色	草田7期
23-9	95層	土師器	小型丸底壺	8.5	—	(7.8)	外 ヨコナデ、ハケ後ヨコ ナデ、ヘラカツリ 内 ヨコナデ、ナデ	施土 焼成 良好	石英、長石颗粒を含む 焼成 良好	淡褐色 内 淡褐色	小谷3～4式四隅
23-10	88層	土師器	腰	(14.4)	—	(7.6)	外 ヨコナデ、風化 内 風化	施土 焼成 良好	1cm前の石英、 砂粒を含む 焼成 良好	淡褐色 内 黑褐色	南向口縫 草田6期
23-11	75層	土師器	腰	(14.6)	—	(5.3)	外 ヨコナデ、ナデ 内 ヨコナデ、ナデ	施土 焼成 良好	石英、長石颗粒を含む 焼成 良好	淡褐色 内 淡褐色	複合口縫 外面に漆がみられる 草田6期
23-12	75層	土師器	腰	(13.8)	—	(4.6)	外 ヨコナデ、漆 内 ヘラカツリ、ヘラカツリ	施土 焼成 良好	1cm前後の砂粒を含む 焼成 良好	褐色	複合口縫 草田7期
23-13	75層	土師器	腰	(15.2)	—	(4.5)	外 ヨコナデ、ヘラカツリ 内 ヨコナデ、ヘラカツリ	施土 焼成 良好	1cm前後の長石、 石英を含む 焼成 良好	淡黄色	複合口縫 小谷3～4式四隅
23-14	95層	土師器	腰	(30.8)	—	(22.0)	外 縱部に突起、ヨコナデ、 ナデ、ナナメ、ナマコ文、ナマ コナデ、しづら縄、 内 ヨコナデ、ナマコ文、ナマ コナデ、ナマコ文、ナマコ文、 ナデ	施土 焼成 良好	石英、 砂粒を含む 焼成 良好	灰白色	複合口縫 小谷3～4式四隅
24-1	95層	陶質土器	縦筋文打捺 短脚壺	(16.2)	—	(8.4)	9. 縱筋文、1cm間隔で幅1cm の凹凸を含む ナデ、当て具瓶を消すよ うに縦方向のナデ、撒道 压印	施土 焼成 良好			単純口縫 削刮平滑の成安の土器 4c後半期
24-2	95層	陶質土器	直片	—	—	(7.5)	外 縱筋文 内 ヨコナデ、撒道直片	施土 焼成 良好		施土平滑の成安の土器 4c後半期	
24-3	88層	土師器	縦穴付土器	—	—	(8.7)	外 ハケメ、ナデ 内 ヨコナデ、ナマコ文、ナマ コナデ、ナマコ文、ナマコ文、 ナデ	施土 焼成 良好		幅6.3cm 幅約2.0cmの船穴	
24-4	95層	土師器	把手付円筒 土器	(11.6) 把手付 8.0	15.2 把手付 1.6	43.0 把手付 3.2	外 ナデ 内 ヘラカツリ、撒道直片、 ナマコ文、ナマコ文、ナマ コ文、ナマコ文、ナマコ文、 ナデ	施土 焼成 良好	1～2mm程度の 砂粒を含む 焼成 良好	淡黄色	内側に埋付着、一部黒變 外側の底部に1本の沈線
25-1	97層	弥生土器	腰	—	—	(4.5)	外 竹節による円形の樹突文、 横筋によるC字突文、 突起 内 ケズリ後ナデ	施土 焼成 良好	1～2mm程度の 砂粒を含む 焼成 良好	外、浅黄褐色 内、ぶい青褐色	スタンプ文土器 草田2期

## 土器(3)

遺物 番号	遺構名	種類	器種・部位	法量(cm)			調整・文様の特徴		色調	備考	
				口径	直径	厚さ	調整・手法	施土・焼成			
25-2	97層	弥生土器	壺	—	—	(3.5)	外: 開口縫文、ヨコナデ 内: 瓢化	砂土 焼成 良好	微細粒を含む 焼成 良好	褐色	松本編年IV-1様式
25-3	97層	弥生土器	壺	(24.8)	—	(3.6)	外: 開口縫文、ヨコナデ 内: ヨコナデ	砂土 焼成 良好	1mm前後の長石・ 石英を含む 焼成 良好	淡褐色	複合口縫 草田2期
25-4	97層	弥生土器	壺	(17.4)	—	(5.2)	外: 開口縫文、ヨコナデ 内: ヨコナデ、ヘラケズリ	砂土 焼成 良好	1mm以下の長石・ 石英を含む 焼成 良好	浅黃褐色	複合口縫 草田3期
25-5	97層	弥生土器	壺	(32.4)	—	(6.2)	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	砂土 焼成 良好	微細粒を含む 焼成 良好	灰白色	複合口縫 草田5期
25-6	97層	土師器	小型丸底鉢	9.1	—	6.3	外: ハラミガタ、ハケメ、 ナデ、赤色顔料 内: 脱色・斑駁、ヘラケズリ ナデ	砂土 焼成 良好	微細粒を含む 焼成 良好	褐色	複合口縫 大人玉土器 草田6期
25-7	97層	土師器	低脚壺	—	5.4	(3.2)	外: ハケメ、回転ナデ 内: 瓢化	砂土 焼成 良好	1mm前後の砂粒・ 石英を含む 焼成 良好	褐色 淡黃褐色	草田6期
25-8	97層	土師器	壺	—	—	(8.7)	外: ヨコナデ、貝殻復刻に よる刺突紋 内: 瓢化	砂土 焼成 良好	1mm前後の長石・ 石英を含む 焼成 良好	灰白色	複合口縫 草田6期
25-9	97層	土師器	壺	(23.6)	—	(12.1)	外: 列点文、瓢化 内: ヘラケズリ、瓢化	砂土 焼成 良好	長石・石英を微量 に含む 焼成 良好	灰白色	複合口縫 草田6期

## 木製品

遺物 番号	遺構名	種類	法量(cm)				備考
			長さ	幅	高さ	厚さ	
7-3	試掘	板状木製品	(18.2)	17.2	—	0.7	一方の側面に径3mmの木釘が2箇所空たれている
14-4	SE01	机	107.0	6.0	—	—	先端14cmを加工して尖らせている
14-5	SE01	板状木製品	130.0	19.7	—	8.0	一部にハツリ痕 部材か

## 瓦

遺物 番号	遺構名	種類	法量			備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
7-4	試掘	丸瓦	(10.0)	(12.9)	2.5	片面にコビキ入の痕跡 片面に縱方向のケズリ痕 16世紀
12-9	SG01	平瓦	(27.0)	(15.3)	2.3	片面に剥離削のキラ粉 内外面が剥化 16世紀 (江戸時代後半) 焼成下期
12-10	SG01	丸瓦(玉縫割)	(12.4)	12.3	2.4	片面にコビキ入の痕跡と括り縫痕 片面にヘラ状工具によるミガキ痕 16世紀 焼成下期
14-1	SE01	平瓦	(11.3)	(12.1)	2.2	片面はナデ、凸面はハケによる調整 焼成以降
14-2	SE01	丸瓦	(8.7)	(6.0)	2.4	片面にコビキ入の痕跡 片面にヘラによるケズリ痕 16世紀後半
26-1	崩落土	軒平瓦	瓦(当高4.1cm・外幅0.9cm・脇幅1.8cm)			内側周囲に剥離。唐破綻 16世紀後半か

## 金属製品

遺物 番号	遺構名	種類	法量(mm)			重量(g)	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
16-2	鏡台跡	楕円鉛錠	(15.7)	(10.1)	3.4	632	一部破損、擦痕、凹みあり 鏡の上刷
21-14	55層	鉛錠	残存高1.6	6.1	0.1	2.4	口銘部

## 石製品

遺物 番号	遺構名	種類	法量(mm)			重量(g)	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
12-11	SG01	滑石・矽石	12.1	10.0	5.7	1.015	一部破損、擦痕、凹みあり 鏡の上刷
14-3	SE01	石台	(25.1)	(12.8)	8.2	5.130	四面あり
21-15	55層	被熱石材	16.0	8.3	6.1	1.220	赤色に変色した部分あり (緑の可能性)、金床石か
24-5	75層	仕上げ砥石	10.4	4.7	4.9	217.14	灰白色

# 写 真 図 版

※遺物掲載番号と遺物写真番号は対応している。(例: 9-1 は第9図-1を示す。)





調査前近景(南西から)



調査区北側石列検出状況(南西から)

図版2 土層断面



土層断面南壁 A-A' (北西から)



土層断面東壁 B-B' (北西から)



第1遺構面(南西から)



第1遺構面 SG01 土層断面 C-C'(南東から)

図版4 第1遺構面



第1遺構面 SE01 完掘状況・土層断面(北東から)



第1遺構面 SE01 遺物出土状況



第1遺構面鍛冶炉跡検出状況



第1遺構面楕形鉄滓検出状況

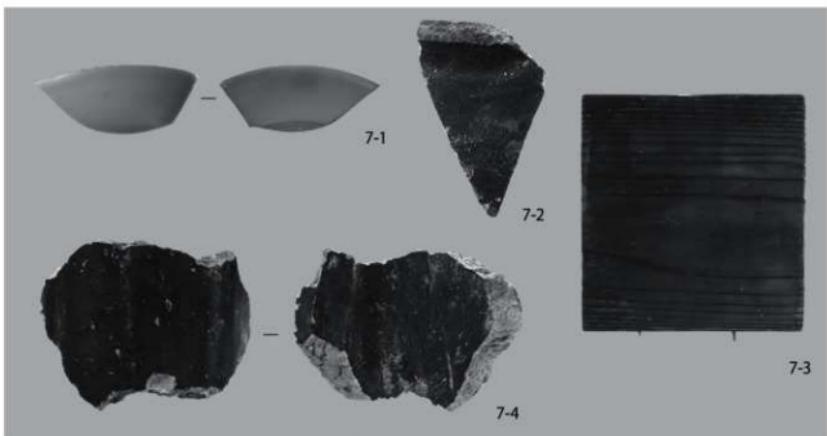
図版6 第2遺構面



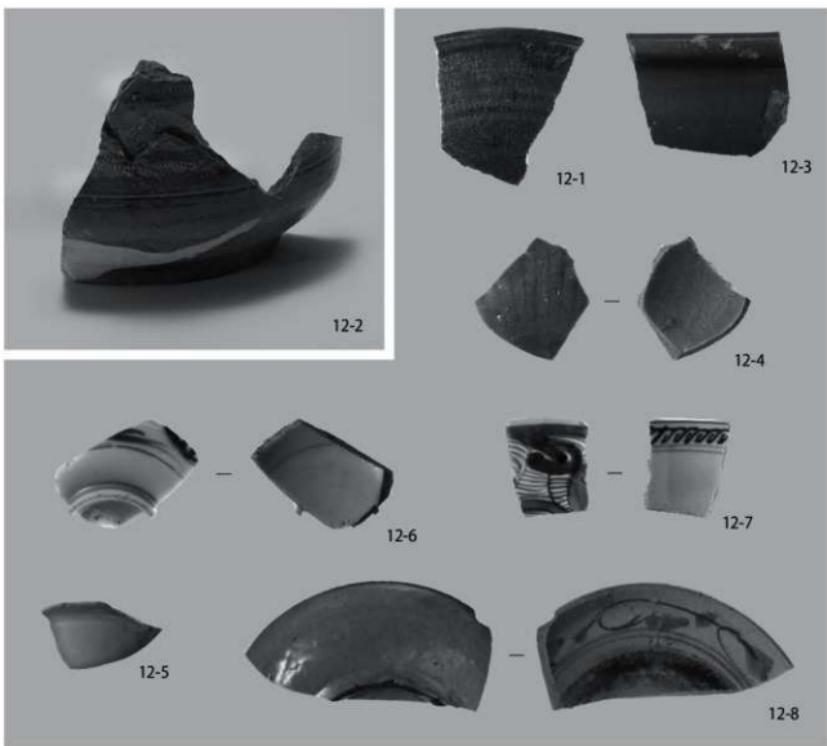
第2遺構面完掘状況(北から)



88層出土の高坏(第23図-5)

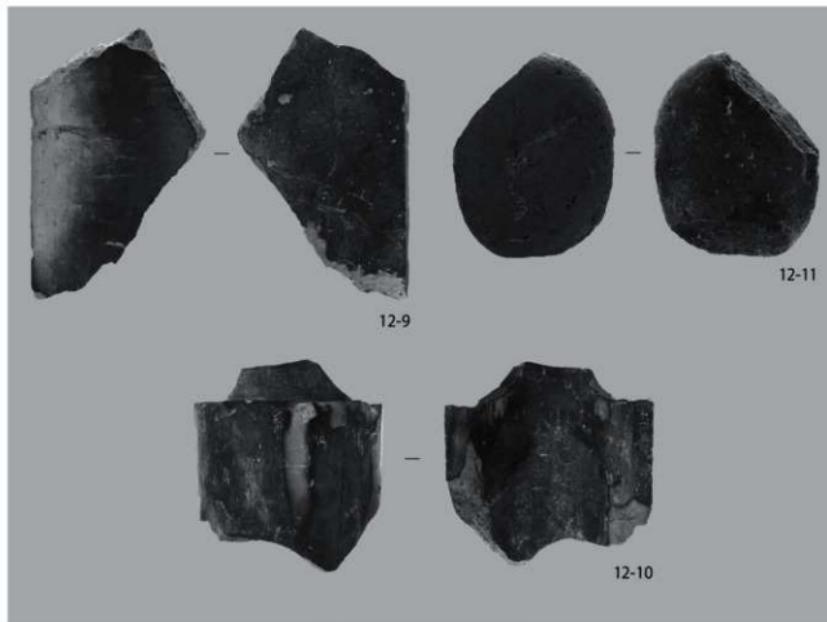


試掘トレンチ出土遺物

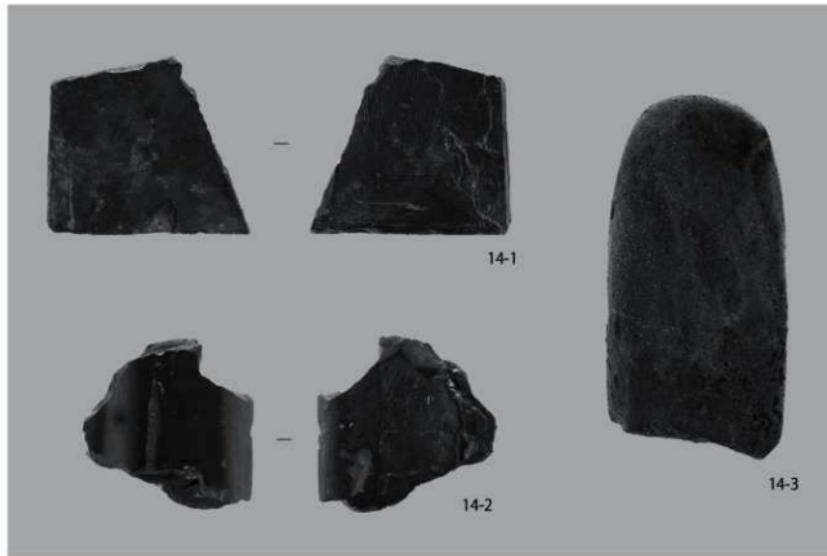


第1遺構面 SG01 出土遺物(1)

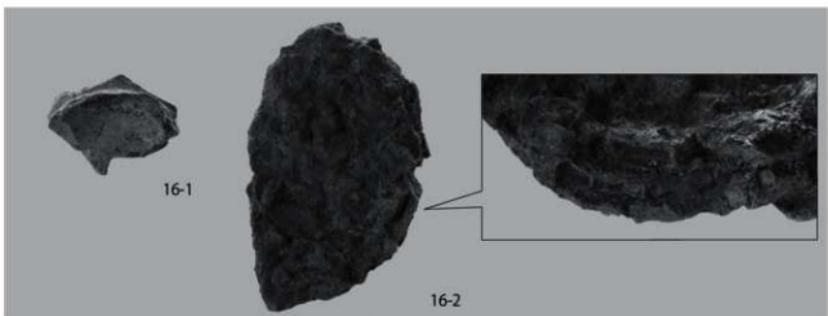
図版8 遺物写真



第1遺構面 SG01 出土遺物 (2)



第1遺構面 SE01 出土遺物

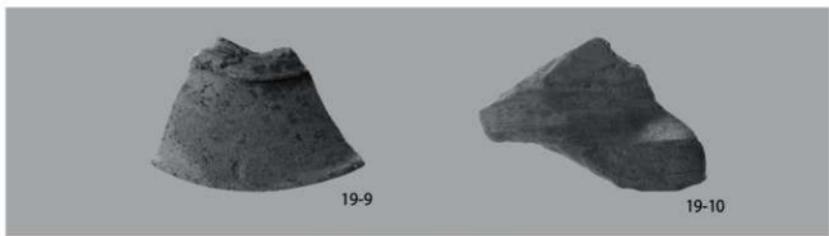


第1遺構面鍛冶跡出土遺物

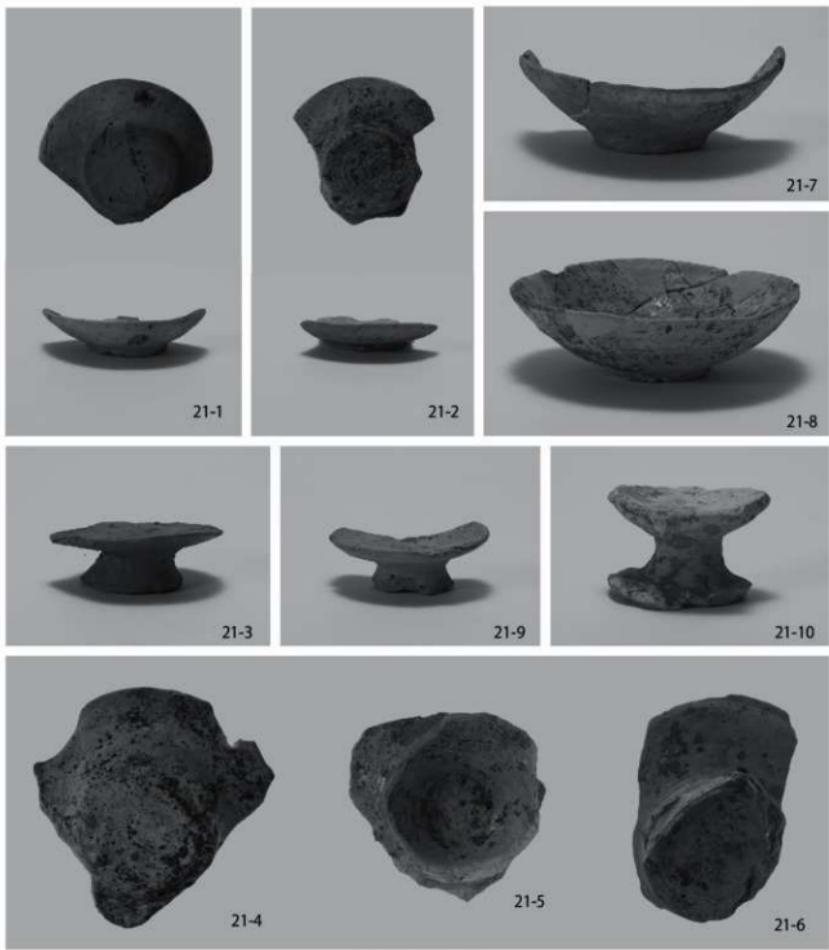


第2遺構面 SB01 出土遺物(1)

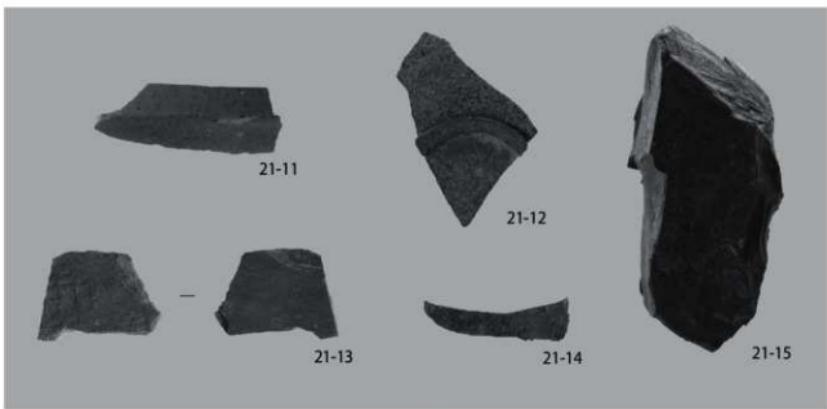
図版10 遺物写真



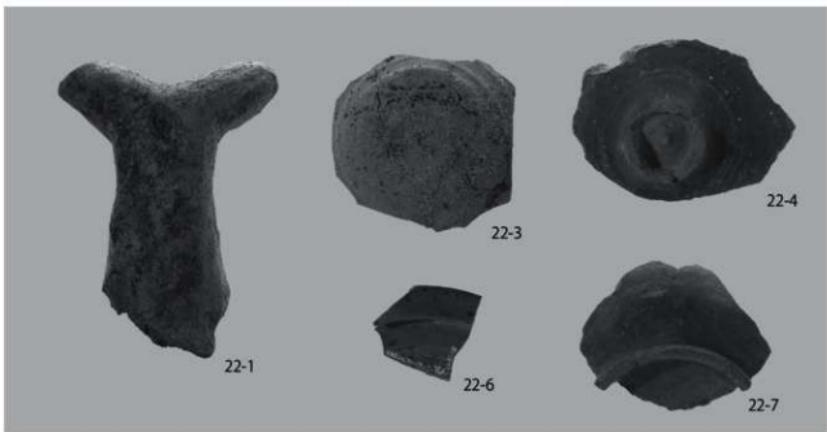
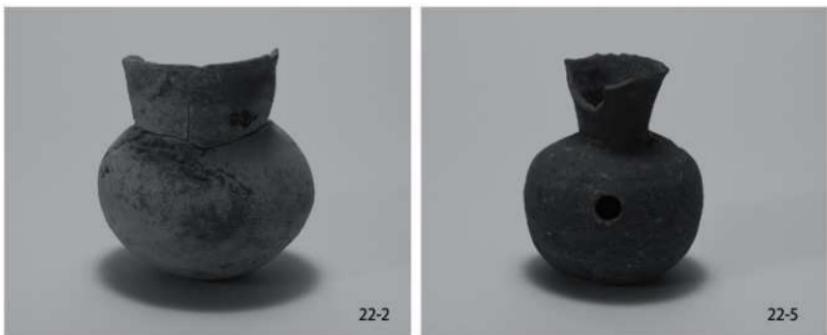
第2遺構面SB01出土遺物(2)



55層出土遺物(1)

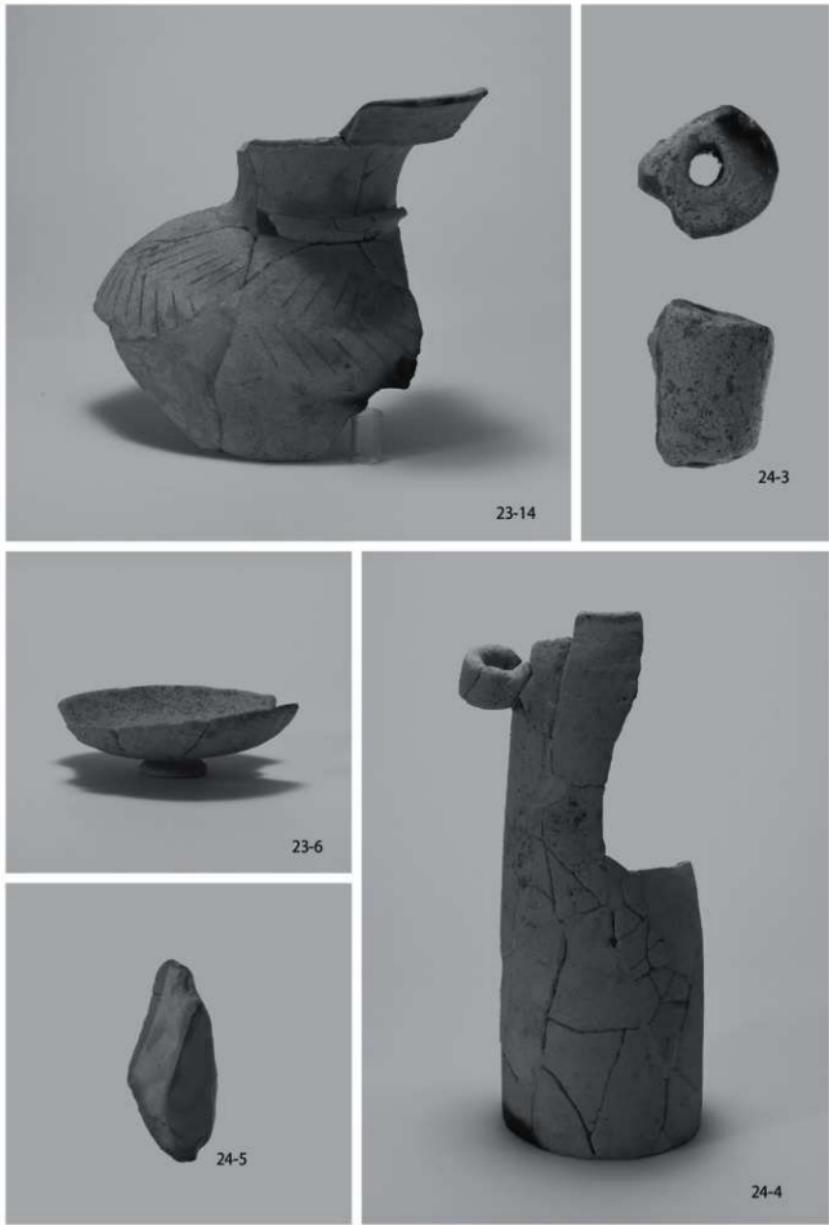


55層出土遺物(2)



62層出土遺物

図版12 遺物写真

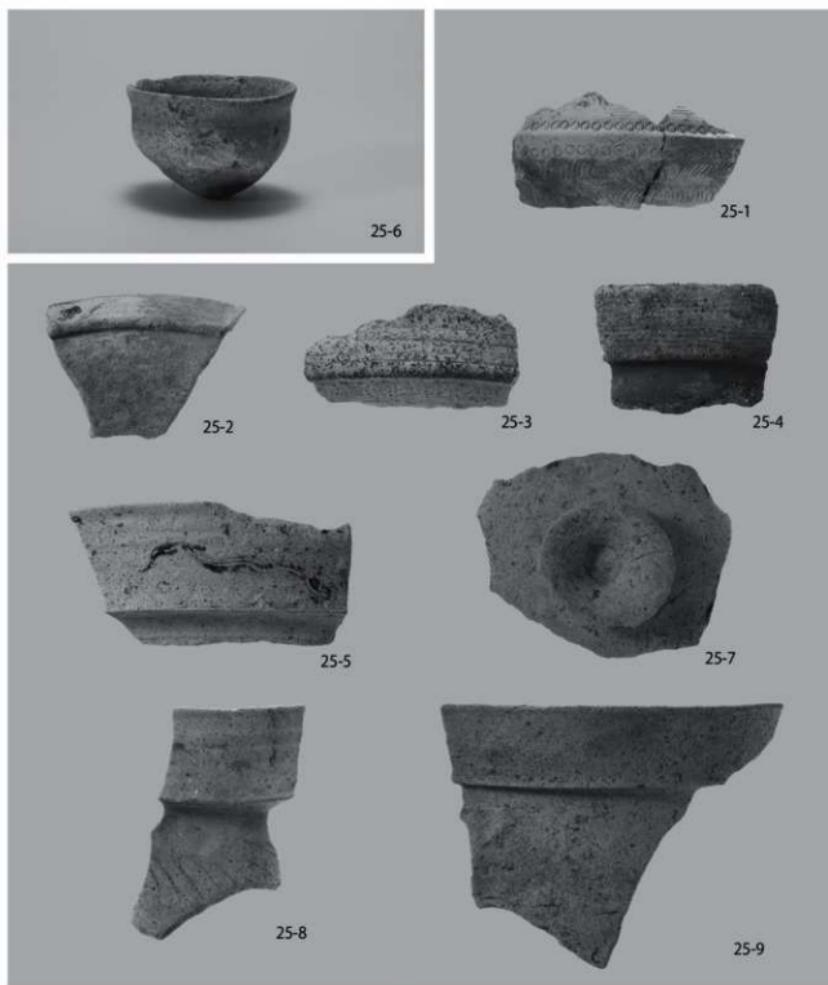


75・88・95層出土遺物(1)



75・88・95層出土遺物(2)

図版14 遺物写真



97層出土遺物



層位不明出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	さだまえいせき・さだじんじゅしんぐうじあと						
書名	佐太前遺跡・佐太神社神宮寺跡						
副書名	重要文化財佐太神社正中殿ほか2棟防災施設等事業に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第214集						
編著者名	廣濱貴子、徳永隆						
編集機関	松江市 (松江市文化スポーツ部 埋蔵文化財調査課) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL:0852-55-5293						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 (埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL:0852-85-9210						
発行年月日	令和5(2023)年3月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
市町村		遺跡番号	東経				
佐太前遺跡・ 佐太神社神宮寺跡	島根県松江市 鹿島町 佐陀宮内 72・73番地	322016	K-3 k-36	35°30'33" 133°00'22"	20220117 ～ 20220323	105m <sup>2</sup>	防災施設等 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
佐太前遺跡・ 佐太神社神宮寺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世	掘立柱建物跡 池 井戸 溝 鍛冶跡 柱穴	弥生土器・土師器 須恵器・陶磁器 金属製品・石製品 木製品	佐太前遺跡・佐太神社神宮寺跡発掘調査では2面の調査を実施した。第1面で近世の池・井戸と鍛冶跡を、第2面で掘立柱建物跡1棟と溝1条が検出された。遺物は弥生時代中期から近世まで幅広く確認され、なかでも弥生時代末～古墳時代前期と古代後半～中世前半の土器が多く出土した。		

松江市文化財調査報告書 第214集

重要文化財佐太神社正中殿ほか2棟  
防災施設等事業に伴う発掘調査報告書

**佐太前遺跡・佐太神社神宮寺跡**

令和5(2023)年3月

編集・発行 烏根県松江市  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印 刷 株式会社 谷口印刷  
島根県松江市東長江町 902-59